お嫁さんにしてください　(工藤家の事情)

川中流一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お嫁さんにしてください　（工藤家の事情）

【Ｎコード】
Ｎ８８９３Ｕ

【作者名】
川中流一

【あらすじ】
「どうする？桂木夕葉」
交通事故に遭ってしまった幼馴染のお兄ちゃんを助けるには、お金持ちの、黒い服を着たいとこ――工藤朔太郎と結婚をすること。本当は大好きなお兄ちゃんのお嫁さんになるのが小さい頃からの夢だったのだけれど。彼が理事を務める転入先の高校の、隣の席の男の子と同級生達と、双子の兄弟と遺産と夢と約束と。愛してるなんて言えない彼と、愛されてるなんてちっとも知らない彼女の多角関係。

※【改】は改行やらで、内容は変わりません。

夕焼けの告白

【いつもありがとうございます。お勉強をがんばります】

便箋に詰められた文字を読み直してから、一番上の段に【おじいちゃんへ】と書く。半分程に短くなった鉛筆の先にキャップを嵌めて筆箱の中にしまった。色は褪せてしまっているが、ピンク色でファスナーの先が花形になっているお気に入りだ。

便箋を三つ折に丁寧に畳んで封筒に入れた。のりをしてからぱたぱたと手で扇いでみて、何も変わっていない半乾きのそれを持ってちゃぶ台から立ち上がった。

公営団地を出てすぐ角を曲がったところにあるポストに手紙を入れる。差込口に指の付け根まで入れるのは、背伸びをして手ごと差し込んでいた頃からの癖だ。ひんやりとした口から手を抜いた。

「夕葉」

振り返ると、サッカーボールを持った男の子がいた。

「陽ちゃん」

陽ちゃんは同じ団地に住んでいた一つ上のお兄ちゃんで、引っ越してしまった後も夏祭りには毎年一緒に行っている。高校に入ってからは忙しいようでほとんど会うことはなくなってしまっていたけれど。

短く刈り込んだ髪は変わりない。昔から運動神経が良くて、鬼ごっこをすれば誰にも捕まらなかった。――自分以外には。折角遊びに入れて貰ってもとろくさい自分はすぐに捕まって鬼になってしまって、それなのに誰も捕まえられなくて、だけど陽ちゃんだけは捕

まえることができた。陽ちゃんは優しくて格好良くて、人気者だった。
偶然会えたのが嬉しくて、笑顔を向ける。
「どこか、帰るところ？」
「……自手練」
逸らした目を追って電柱を見たが、雀の一匹もいなかった。

＊

「４４、４５、４６……」
公園のベンチに座って、目の前でとんとんとリフティングするのを指折りながら数える。
「４９、５０……あ、」
ぽおんと、高く高く澄んだ空に上がってから、とすんと吸い込まれるようにまた戻ってきて動きは止まった。ベンチの隣に陽ちゃんが座って、前にある砂場をどことなく眺めている。それから、あのさ、と言って口を開いた。
「夕葉、高校は矢羽西？」
「ゆはは高校に行かない」
「え、」と陽介は驚いた声を出して顔を向ける。
「働くの？」
「お母さんのお店で、お手伝いをする」
ぷらぷらと足を揺らしながら、何気ない様子で答えた。

「それって、」

何か言葉を飲み込んだ陽介とじっと目が合った。落ちてきた日の光で茶色に透き通る瞳を見つめて、それから慌てて陽介は目を逸らした。

「――夕葉は人見知りだから、接客の仕事って大変じゃないかな」

「大丈夫。ゆははお皿を洗ったり、お掃除をしたりなので」

そっか、とちょっとだけほっとしたような顔をして、しかしやはり躊躇いがちに聞く。

「お母さんは、何て言ってるの？」

「ゆはは余り役に立たないけれど、ゆはが学校に行くのはとても大変と」

「――でもさ、ゆはが本当に高校に行きたいなら、話してみたらどうかな。奨学金だってあるし」

「ゆははあまり学校に行きたくない」

ぽつんとした言葉が会話の糸を断って、垂れた糸がぷらぷらと二人の間を揺れた。

「……」

「……怒った？陽ちゃん」

「何で」

陽介は少し面食らったように彼の小さな幼馴染を見やった。

「陽ちゃんは、高校に行かない人をお嫁さんにはしない？」

「何で！」

突然の言葉に思わず目を逸らしかけたが、しかし真剣な眼差しに気がついてその目の前に手を伸ばす。

「そんなことないよ」

手はくしゃ、と頭に置かれた。

「好きなら何も、関係ないと思う」

「好き……」

「え！」

風が囁くようなか細い声に陽介の耳は朱色に染まり、固まって目の前の女の子をまじまじと見返した。少女は続けてぽつんと呟く。

「ゆはも誰か、好きになってくれる人がいるかな」

「夕葉……」

それから何でもなかったようにことんと立ち上がった。

「では、ゆははそろそろお母さんを起こさなければならないので」

「夕葉！」

小さな手を掴んだ。

「好きだよ」

真剣な眼差しを夕日のかかる彼女に向けた。この日が落ちてしまう前に。――何故だかそんな刹那の焦燥に駆られていた。

「俺と、付き合ってほしい」

「おつきあい、」

無理も無い。それはおよそ十年続いた安楽の関係の、唐突な終わりを意味していた。この状況をなんとか咀嚼しようと反復する彼女を見て、彼は弁解するように頭を掻いた。

「夕葉のこと……妹みたいに思ってた。俺の背中に隠れて、危うくて、俺が見てなきゃと思って。だけど、力を貰っていたのは俺だった。背中にお前がいるから負けられないって思う。――夕葉に見ていてほしい」

「あの……え、」

彼女が大いに戸惑うのを見て、彼もまた戸惑った。そして確かに感じたと思った自分への好意は、未だ幼馴染としての範疇を出ないものだと知り恥ずかしさで身が火照った。もし彼の同級生の誰かに聞かれていてでもしたら、本当に焼け焦げていた方がまだましだと思っただろう。

しかし彼を駆り立てたに違いない彼女の一途な瞳も、彼を動揺させたに違いない言葉も、事実存在したのだ。

――無自覚。

彼はそう信じた。戸惑いであって、拒絶ではないこと。そしてそれは恐らく正しい判断だったろう。

「返事はまだいいよ」

どこか切迫した空気から、彼がいつもの柔らかい表情に戻ったの

を見て彼女はほっとした。
今度サッカーの大会があるんだけど、と彼は切り出した。何気ない調子を装ってはいたが、それは彼が将に待ち望んだ舞台であり、それまでの努力は必ず結ばれるに違いなかった。ただ只管にこの小さな勝利の女神の微笑みに焦がれていた。

「その試合、見に来てくれないかな」

こくんと、自然な流れで彼女は頷く。彼は依然として自分の心拍が早いのを悟られたくはなく、サッカーボールを持ち上げそれを帰りの合図とした。
しかしポケットに入れた手に小さな包みが当たって思い出す。それを彼女の色白の手に押し付けぼそぼそ言った。
もし勝ったら――
という言葉を切って、彼女を見つめて誓う。

「――俺、勝つから」

じゃ、と言うか言わないかのうちに陽介は背を向けて足早に公園を去っていった。

おじいちゃんを訪ねて

こてん、と首を傾げた。花のピンが片耳の上に行儀よく差してある。

雨も降らないのに、一向に試合は始まらなかった。ただただ何か慌しいばかりで、ただただ何か不安を煽るだけで、何も始まらなかった。

「陽ちゃん……？」

サイレンの音がどこか遠くで鳴り響いていた。

＋＋＋＋

彼は昏睡していた。

居合わせた人に依ると、人を助けて車に轢かれたそうだった。

医者に依ると、脚を切断しなければならないということだった。

親は、彼の目覚めを待って欲しいと言った。

執刀は三日後に決まった。

「あああ、あああ、陽ちゃん、陽ちゃん……」

誰も宥められずに――正確に言うと宥められる程身近な人間はいず――ただ不憫と気の毒を思ってこれを止める者は誰もいなかった。

しかしいつまでも、本当にいつまでも大泣きするものだから、遂にはベットから引っ剥がされて、彼女は病院の屋上でそれを続けることになった。

「あああ、あああ、陽ちゃん、陽ちゃん……」

全く有り得ない事だった。彼はヒーローなのだ。どんなに辛く悲しいことがあっても、泣き声を聞きつければすぐに駆けつけて全ての苦しみから救い出し、彼女を慰めてくれる筈だった。

しかし一向に彼は現れず、彼女の声と涙が枯れ尽きてしまう頃には夕方になっていた。

面会時間が過ぎて彼女はほとんど引きずられるようにして病院を出て、病院は漸く厄介払いをすることができた。

泣き腫れて帰ってきた彼女を待っていたのはただいつもの汚れた洗い物だけで、母親は家には居なかった。

ぐずぐずしっぱなしでも真夜中には自分の布団に潜り、布団の中一人ぼっちで彷徨う心は『おじいちゃん』へと向かった。

親戚はこの『おじいちゃん』しか知らなかった。両親は駆け落ちだったのだ。おじいちゃんの存在を知ったのは小学校に上がる時で、真っ赤なランドセルが贈られて来たのが最初だった。それから義務教育の九年間は彼女の養育費が約束され、ただし月に一度手紙を書

くことが条件となった。とは言っても、実際のところ彼女にとってそれはかなり貴重な楽しみとなっていた。

広告の裏でもなく綺麗な便箋を使って、遠くに手紙を送る人がいるのだ。『おじいちゃん』がどんな人なのかを想像するのも楽しかったし、想像の中で彼女はひどく可愛がられていた。公園で、スーパーで、孫とおじいちゃんの関係を見てそれを自分にも当て嵌めていたのだ。

自然、『おじいちゃん』は彼女の心に大きく占められるようになった。例え一度たりともその返信が送られてくることはなかったとしても。

きっと、助けてくれる。

彼女はそう確信していた。『何から』なのかを考えるまでもなく。

次の朝、と言っても冷めやらない不安と興奮で一睡もできなかったのだが、眩しく差し込んだ日の出を合図にしてもそもそと布団から這い起きた。そうして顔を洗い、音を潜めて『仕事』を片付けてしまってから、うさぎの耳のついたリュックサック（小さい頃からずっと一緒だった）を背負い、手紙の住所を頼りに家を出たのだった。

二時間電車に揺られ、運賃の足らないところからは歩いて、空が朱に染まるころに漸く彼女は足を止めた。――遂に着いたのだった。そしてぽかんと口を開けて、握り締められていた紙を開き何度も何度も目が行き来した。

それは大きな大きな、大きなお屋敷だったのだ。

彼女は自分の想像からはかけ離れた『おじいちゃんち』に衝撃を受けながら、ただ突っ立っていた。次にどうしたらいいか分からなかったのだ。

しかしきいと門の横の小さな（とは言っても大人が通るのに十分な大きさの）扉が開き、箒を持った人の良さそうな老父が出てきた。自分が困っていることなどお見通しのようなこのタイミング――この人に違いなかった。

彼女は棒になった足も忘れて駆け寄り、尋ねた。

「ゆはのおじいちゃんですか？」

『工藤朔太郎』

「お前のじいさんは死んでいる」

ぽけっと前の男の人を見ていた。この人は、誰だろう。

おじいさんの後を付いて行って、門を入ってから三番目の建物の中、待つように言われて浅くソファに腰掛け行儀良くしていた。おじいちゃん。

だけど入ってきたのはずっと若い男の人で、入ってきて一番にひどいことを言った。

この人は、嘘を付いている。

黒い服を着ているし灰色がかった冷たい眼の色で、何か悪い人に違いなかった。

次にその人はポケットから薄桃色の封筒を取り出した。あ、と声が詰まった。それは、それは――宛先と名前が見覚えのある字で書かれている。……開封されていた。

「か、勝手にっ」

膝がぴんと伸びて立ち上がっており、顔を真っ赤にして手を突き出していた。

「勝手に？」

くすりと男は笑い、返すどころか宛名を確かめるように読んでみせた。

「工藤朔太郎――俺の名だ」
「違う」
「違う？」

反射的に返した言葉に、男は面白そうに口端を上げる。

「それなら俺は誰だ？」
「知らないっ」

男は動いた。自分に向かって歩いてきた。怖いのに、怖くて膝が伸びきったまま動けなかった。

「俺はお前を知っている」
「桂木夕葉――お前は俺のいとこだ」
「い、いとこ……？」
「俺のじいさんも、『工藤朔太郎』だよ」

この瞬間に彼女は混乱した。ただでさえ混乱でいっぱいなのに、まるでスフィンクスを目の前にして謎を解かなきゃ食べちゃうぞと言われたような脅迫感に襲われていた。

「だが今は――じいさんが死んだ今は、この世にこの名は一つだ。失くなった名前と同じ程にな」

ぼろ、と涙が毀れた。何を言っているのか分からなかった。分かりたくなかった。しかし『　　』の部分だけはくっきりと、心に焼き付き現像された。

「お、じいちゃんが……ゆはのおじいちゃんが、」

ぼろぼろぼろぼろと涙は毀れて言葉にならなかった。

「そう泣くことか？顔も知らない人間の為に」

彼は背を向けた。

「帰れ」

彼女は真っ暗闇に放り込まれた。がらがらとの音も聞こえなかった。突然自分はそこにいて、ただただ咽び声が瓦礫の山へと吸い込まれていった。

「陽ちゃんが……陽ちゃんはっ……」

「――『陽ちゃん』？」

ちらと目を向け、手持ち無沙汰に封筒をこんこんと机に当てる。

「手紙に書かれていた奴か」

「助けてください……」

言いながら、彼女はへたへたと床にしゃがみ込んだ。鼻水と涙で顔をぐちゃぐちゃにして、ただ助けを求めた。彼女にはもう望みが無かった。自分のいとこだというこの目の前の男以外には。

男は何も言わずに彼女を見下ろしていた。

「ゆはをお嫁さんにしてくれる人です……！」

ぐい、と顎が掴んで持ち上げられた。睨まれている。

「嫌いだ」

忽ち涙に濡らされていく手を離して、彼は蔑むように彼女を見下ろした。

「くだらねぇ茶番は終いにして帰って母親に伝えろ。娘を寄越したってあんたに渡る遺産は一文もないってな」

「お母さん……？」

「水商売の、あんたの母親だよ。御曹司の次男を誑かしたはいいが、頼んでもいないのに駆け落ちされ、挙句にガキだけ作ってさっさと早死にされた幸の薄い女だ」

「お、お母さんは」

これには彼女も物申さんと顔を上げ、ふるふる震えながらも睨み返す番だった。

「いいお母さんです。ゆはがきちんと生活ができるのは、お母さんのおかげです。悪く言わないでください」

しかし全く悪びれた様子もなく男は肩を竦めた。

「よくできた躾だな。自分じゃ巻き上げた『養育費』でブランドのバッグを買っておいて、そんな貧相ななりをさせている子供に感謝されているなんて」

彼女は『決別』する事にした。この人は悪い人で、陽ちゃんを助

けてくれる人ではない。
何も言わずに彼女は立ち上がった。
お母さんを悪く言う人を相手にしてはいけない。――そう、陽ちゃんが励ましてくれた言葉だ。そう思うとさっきまであんなに怖かったのに、今はしゃきりと立つことができた。
後ろでとさ、と音がした。束になったお札が床に落ちていた。

「『病気の一人娘』に見舞いだ」

一瞥して彼女は立ち去った。ぱたんと戸がしまった後、くっくと男の口が歪む。

奇跡の値段

「陽ちゃん……」

手を取って、ひりひりする自分の頬に当てた。こうしてもらうといつも痛みが引いていくのだった。――ぐじぐじした胸の痛みまでも。

物言わぬ彼が横たわる白パイプのベットに、ぽすんと頭を乗っけた。シーツからは陽ちゃんの匂いがする……気がした。陽ちゃんは眠っているだけだ。明日、脚が無くなるだなんて嘘だった。

「好き……」

『ゆびきりげんまん』

返事なんかずっと昔にしているのに。

――こんこん、とノックがされた。頭を上げると、お医者さんが何人も入ってきた。白髭を付けた一番偉そうな人が自分の前で止まり、それから次々と若い医者まで居並んだ。こちらが件の患者です、と何だか冷や汗を描きそうな声音で言い、はげ頭の後ろから誰かが一歩前に出た。――白い中、ただ黒。

は……と息を飲むや否や、それはもう反射的に陽ちゃんを庇ってその前に立った。

「奇遇だな、桂木夕葉――そして手間が省けた」

昨日の男だった。彼女なりの威嚇の目を向けると、ふ、と男は笑う。

「日比谷陽介の脚は治る」

え、と思わず声を発してしまった。

「で、でも」

縋りたいのと、信用してはいけないのと。お医者さんを見た。治る可能性はゼロだと、そう言った。腱がずたずたで、義足にする以外もう二度と自分で立つことはできないと。

「責めてやるな。特にこいつらだけが無能って訳じゃねぇからな」

薄い唇で微笑して、男は事務的な口調になって続けた。

「手短に言おう。アメリカに外科医の知り合いがいる。資料を送らせて訊いてみたところ、スポーツ選手としての復帰までは保障できないが、少なくとも日常生活を送るのに不便はない脚にはできる――勿論、自分が執刀すればの話だが、ということだ」

彼女の頬にみるみると薔薇色が差すのが見て取れた。男の口元は何故だか笑う。

「『奇跡』の値段は三千万――安いもんだろう？」

吃驚して目が開く。

「ちなみに今の話は４時間３２分前の話で、手術の成功精度は時間とともに下がっていくし、後一日遅れたら自分にも手は負えないだ

ろう、ということだ。――まあ兎に角、後１９時間程の猶予はあるということだ。いとこのよしみでジェット機くらいは貸しやろう」

「どうする？桂木夕葉」

明らかに何か楽しんでいる口調だった。彼女の拳は震える。――人の葛藤と屈服を楽しんでいる。昨日、先に無礼をしたのはそっちなのに、少しでも思い通りにできなかったことへの報復なのだ。――でもそれしかなかった。彼女の唇は震える。

「……絶対に、返すので――」

「断る」

――信じられない。こんな、こんな酷い人間がいるなんて。十分辱めた後で、こんな、絶望を楽しむ為に希望を与えたのだろうか。

「なんなんだ？その顔は。昨日『初めて』会った人間に、金を貸さないというのがそれ程の畜生か。俺は鬼でも仏でもねぇしここは天国じゃないんだぜ？」

「お願いします……」

それでも彼女はしゃがみこんだ。額をこつんと床にぶつけた。医者達はちらちらと視線を左右にさせながらも何も言わないでいた。

「俺の言葉に二言はねぇ」

彼は無情に言い放った。

「まして人を苛める趣味もねぇ」

これは絶対に嘘だ、と場に居合わせた良識ある誰もが思った。

「俺が訊いたのは、零細にでもお前自身に払い得る可能性があるからだ」

彼女は頭の上から降ってくる言葉の意味が全く理解できなかったので、男の表情を読もうと顔を上げた。医者達も各々可能性を模索してみながら男の次の言葉を待った。

「確かにお前の母親にはじいさんの財産に関して一切の権利はない。ただしその娘――工藤財閥元会長、工藤朔太郎の孫娘についてはある条件を満たした場合はその権利を擁する、と遺書には記されてあった」

「条件……」

誰かがこくと唾を飲んだ。注目を鬱陶しそうにしてじろりと男が睨むと、医者達はそそくさと会釈をしてから病室を出て行った。

眠っている少年を除けば、病室には二人だけがいた。

「義務上お前に告げる」

眼は笑わず、口元は小馬鹿にしたような横柄な態度で男は告げた。

「その孫娘が、工藤本家家族の家系に組み入れられた場合、だ」

「……？」

「しかし養子は無理だろうな。お前の大好きな母親が今日中にお前

を手離すことに同意したとしても、肝心な、一応の家長である俺の父親とは連絡が取れない。宇宙にいるらしいからな」

「宇宙……」

ぽかんと口を開けた。取り敢えず彼女の想像力が反応できたのはその言葉だけだった。

「どう思う？」

そう言われても、と小首を傾げる程の親しさは見せたくなかった。

「さっき断ると言ったが、正確には俺にも無理だ。何故ならじいさんがこう遺して逝きやがった。『家を継ぐと言う明確な意思を示し、工藤姓において婚姻もしくは確実な婚約が為されるまでは遺産相続に関する一切の権利を保留する』――長男に宇宙に飛び出され次男に駆け落ちされ、自由で勝手な息子達に余程堪えたんだろうな」

「まあ、俺にとってはそう大した話でもねぇ。そもそも継ぐのが自然の流れだし、いずれ適当な女も娶るだろう。わざわざ念押しされなくとも夢だの女の尻だの追いかける奴の気の方が知れねぇよ」

さて、と言って彼は目の前の娘を見据えた。

「俺の義務はここまでだ」

じゃあな、と言って男は踵を返して出て行った。

一人になった。

何？結局今の話は何だったの？義務？今告げることが？陽ちゃん

は……？

三千万……ゆはが支払える可能性……遺産、家系に……養子でなくて――

『婚姻』

ぞぞぞと脳天を突き抜けるような電流が走った。がらんと戸を追いかけ、走った。会談を駆け落ち、走った。男の背。

「待ってください！」

婚約という名の

「断る」

はあはあと吐く息が白く、そして消えていく。ダメ。絶対。お願い、これしかない……

「確かにその通りだ」

男は溜息を吐きながら答えた。

「ただ嘆くだけでなく、ただ縋るだけでなく、お前が自らの犠牲を買って出たことについては見直そう。――だがまだ甘い。何故俺までが、その犠牲を払わなきゃならねぇ？　それとも、自分が申し込みさえすれば誰だって男は諸手を挙げて喜んでくれるだろうと、そう思っているのか？」

見据えて、男は語調鋭く突き返した。

「お前との結婚なんてお断りだ、桂木夕葉」

沈黙が落ちた。胸が焼け切れるように熱い。喉がひりひりする。もう走れない程走った。

「――だって……」

頬が濡れて、空気が熱を奪っていく。

「何で話したか？」

少し考える素振りをして、ゆっくりと男は口を開いた。

「そうだ。遺書の処理に関しては、本来ならもう少し落ち着いてから弁護士にでも任せようと思っていた。――だが昨日、突然お前の方からやってきて『今』金を必要としていることが分かった。金はいつでも同じ価値な訳じゃねぇ。お前が俺に切迫した状態であることを知らせた為に、俺にもお前の利益に関する部分を速やかに話さなければならない義務が生じた」

事務的な言い回しは彼女に何も伝えていなかった。無言でじっと見つめる様は心理的な説明までも要求されており、やれやれと彼は続けた。

「俺も理想の結婚を求めている訳じゃねぇし、遺産騒動は長引かねぇ方がいい。だからまあ、些か急ではあるが、いとこ同士の婚姻が合法である以上、益が一致すれば結婚という契約も有り得ると考えた」

一息吐いて、頼りなさげな薄い色素の瞳を見た。

「だがお前は違うな、桂木夕葉。お前にとって結婚は、理想そのものだ。割り切れないだろうし、割り切る必要もないだろう」

「でも、陽ちゃんが……！」

「冷静になれ。死ぬ訳じゃねぇだろ。それともお前がそれほど懸命になる日比谷陽介という男は、脚を失うよりお前を失うことを選ぶ男なのか？」

違う。違う。陽ちゃんの、夢だった。小さい頃から、高校の冬の大会に出るのが……。ゆははいっつも陽ちゃんに助けてもらっていた。ゆはに出来ることがあるなら、何だって――そう、何だって……

「結婚してください」
「名前も知らない男と？」
「工藤朔太郎」

何十回も書いた名前。
突然背をしゃんと伸ばして向かってきた少女に、呆れたように男は首を振る。

「不本意だ。甚だ不本意だ。理想を求めはしないが、幾らなんでも他の男を想っているのに無理矢理結婚させられた、みたいな態度を取られるのでは余りに俺が不憫だ。月並みな意見だが、俺は不誠実な結婚はしたくないしされたくない」
「ゆはは、誠実でいます」
「憐れだな……この状況に関わっている全ての人間が憐れだ。しかし俺も些細にでも足を踏み入れてしまった以上、多少の責任はある。もしもお前に偽りのない覚悟があるなら、俺も誠意を以って応えよう」

男は見据えた。
「日比谷陽介と今後一切の接触を断つ覚悟はあるか？」
「はい」

そのままの表情で、揺ぎ無い口調で少女はそれに答えた。

「――驚いたな」

彼はその顔に迷いを見出そうとした。静かな水面に石を投げ込むように。

「俺に従えるか？」

「はい」

彼女の表情には一瞬の躊躇いも認められなかった。本当に、全てを投げ打ってでも果たさなければならないらしい。

「ゆはを、お嫁さんにしてください」

＋＋＋

日比谷陽介の手術は成功した。

黒電話で男が話している時、同じ部屋にいた。とは言ってもその会話は英語であった。英語は点数のいいほうだったのだがあえなく自力で解読することは適わず、その最も重要な箇所が分かったのは、電話の初めの段階で男が会話を区切り事務的な口調で彼女に結果を告げたからだった。無感動な彼とは対照的に、彼女は思う存分に喜びの海をたゆたっていた。

「礼はいい」

しかし突然その会話が日本語に変わった時、ぎくりとする。

「ん？桂木夕葉の婚約者だ。一週間程前からな」

瞬く間に潮は引いて、砂と隠すもののない自分だけがぽつんと残った。

「どういう、と言われてもなあ……知らない方がいいんじゃねぇか？」

ちらとこちらを見る。やだ。やめて。いない。

「――ああ？いる。代わるか？」

黒い受話器をこちらに突き出されてしまっていた。ぶんぶんと首を振る。

「接触、しないって……」

こうなってしまった以上、むしろそれは彼女の方から望むことだった。

「最後の別れくらいはさせてやるよ」

くすりと笑ってそのままでいるのは、それは出ろという命令だった。

両手で持って受話器を耳に当てる。

『ゆは？』

――声。本当の、陽ちゃんの声――

「陽ちゃん……！」

『夕葉！』

ぼろぼろと涙がこぼれた。陽ちゃんにも分かっている。自分が今どんな表情でいるか、陽ちゃんが今どんな表情でいるか、声だけでお互いに分かるのだ。

ぱたんと静かに扉が閉まる音が聞こえたが、男がいようがいまいが何も関係なかった。

『夕葉、今別れって、一体何が――』

「陽ちゃん……！」彼女は叫んだ。

「勝って、陽ちゃん。ずっと……！」

がちゃんと、受話器を置いた。

理事長とスカート

「高校には行かないだと？」

男の片眉が均整を崩した。

「はい、もう出願は終わってしまっているので……」

これはどうしようもないことだった。

「――仕方ない」

男はやれやれと溜息を吐いた。

「お前にはここで生活してもらう――近くの私立高校に通う為にな」

話を聞いていたのだろうか。だから、例え私立だろうともう今年の受付はどこでも終わってしまっていて、

「じいさんが理事長だった。――つまり、今は俺が理事だ」

つまり、横暴が利くということらしい。

「中高一貫校だ。すぐに転入の手続きをしておくから、明日からはそこに通え」

「え」

とは言ったが、この時彼女が感じた抵抗は恐らく『普通』とは違っていた。
出て行く分にはいい。学校は授業が終わっていて皆受験勉強に必死だし、彼女がいようがいまいが誰も気にする人はいなかった。このところ彼女が学校を休んでいることに気がついている人が何人いるだろうか。卒業式にしろ、もし出席しなくてもいいのならその分カメラからこそこそ逃げ回る必要がなくなるというものだ。
彼女は写真というものが好きではなかった。ぽつんと一人でいるのを記録に残す必要があるのだろうか。撮ってくれる親もいなければ一緒に写ってくれる友達もいない、小学校の卒業式――あの時は陽ちゃんが来てくれた。
だけど、今はいないのだ。
どこに行ったってこれからは一人ぼっちだった。その上こうも中途半端な時期に入るというのだから、もしかしたらという仄かな期待すら持ってはいけなかった。
「……高校に行かないといけませんか」
はあ？と男は呆れたように見やった。
「当たり前だろ。俺の嫁になりたいなら一定の教養くらいは身に付けてもらう」
「お嫁さんになるのに高校は関係ないと言っていました……」
独り言くらいに小さな声で言うと、は、と一笑に付された。

「好きで結婚した場合だろ」

――全くその通りだった。抵抗というより比較をしてみてつくんと胸が痛む。

「……そういえば、」

ちらと目を傾けると男はふと思い出したようにペンを回す。

「日本の教育機関は春が区切りだったな。――丁度いい、お前の転入は始業式に合わせよう」

危うくお礼を言ってしまいそうになったが、その前に、どうせそのままじゃ付いていけないだろうしな、と嫌味が付け足された。

こういういきさつで桂木夕葉は工藤家に住み込むことになり、ひと月後の高校入学に向けて一日のほとんどに家庭教師が付いた。その生活は彼女が漠然と考えていたよりずっとましなもので、その理由は男と顔を合わせるのが夕食の時間くらいだった事に拠る。三時のおやつが出ることも彼女を喜ばせた。

――そうしてあっという間にひと月は経ち、すっかり引きこもりの生活に慣れた桂木夕葉が高校に通うという事態を思い出したのは、その制服が届いて試着することになった時だった。

私立修学院高校――入学には家柄や資本が考査され、一般には門戸を広くしていない――つまるところ良家の子息子女の為に開かれた学校だった。

そんなことを知る由もなく、彼女は鏡を見ながら、少し短すぎる

んじゃないかとスカートの端を指でできるだけ伸ばしていた。

「短すぎる」

始業式当日の朝、その制服を身に着けて朝食の席に着くと男は眉を顰めた。

――初めて意見が合った瞬間だった。

彼女は云われなく睨まれたが、幸い傍らには着替えの手伝いをした世話係がいて、初めからそういう、つまり膝上丈の寸法だったと弁護してくれた。

「信じられないことだな」

男は倦怠気に溜息を吐く。

「だが学校経営に関して構っている程の暇はねぇ。制服を定めたのがじいさんではないと信じるに留めよう」

そうしてパンにバターを塗り始め、それ以外には大して会話もなく無事に朝食は済んだ。因みに、これが朝食を一緒に食べた初めての朝だった。

学生手帳を検分され、摘み出されそうになった容疑は晴れて漸く学校の門をくぐれた。この時点で何か『今までと違う』違和感を感じ取った彼女だったが、これについては普段からそれほど厳重な検

分が為されている訳ではなく、あまりに彼女が挙動不審な態度を取っていた為に門番に見咎められたのだった。
余裕を見て一時間も早く学校に到着した彼女の判断は正しかった。
というのも、彼女は次には敷地内を彷徨っていた。何故だか周りを雑木林に囲まれた小路にいて、途方に暮れていた。そんな時に雑木林の向こう側から人の声らしきものが聞こえ、思い切って突っ切ってみようと決心をした。

えい。がさごそがさごそと、道でないところを掻き抜けると、彼女の聴覚は正しかったらしく遂に視界が開けた。その瞬間だった。

ばつん

何かに突き飛ばされて彼女は地べたに転倒した。

「あ、あーっ」

という声が聞こえて、すぐさま手を引っ張り上げられる。

「ごめん、ごめんね！大丈夫？」

ジャージを着た活発そうな女の子が、必死に手を合わせていた。
どうやら走っていたところに茂みから
突然飛び出してしまったせいで衝突してしまったらしい。
次に続けて走ってきた女の子がとん、と軽やかに立ち止まる。さらさらとした黒髪を一つに束ねた、綺麗な女の子だった。

「何してんの？茜」
「ぶ、ぶつかっちゃった……どうしよう」
「まあ、取り合えず移動した方がいいんじゃないかしら。皆走って

くるし」

ね？とにこりと微笑むと、手を引っ張られて石畳の方へと導かれる。

「邪魔」

え、と吃驚して見上げるが、表情は微笑んだままだった。空耳かもしれない。

「ねぇ、大丈夫？」

ぶつかってしまった方の女の子が走り寄って来て申し訳なさそうに訊く。

こくんこくんと慌てて二度頷くと、

「急いでるんじゃないの？」

と綺麗な女の子が言う。これにもこくんこくんと頷いて、ぺこりと頭を下げてから急いだ振りで石畳を進んでいった。幸い校舎らしきものが見えている。

「見ない子ね」

「うん……ていうか、なんかあの子――」

「なんか？」

「萌えっ。ちっちゃい。ぎゅってしたい。中等部かなぁ」

「高等部の制服だったけど？」

「えーっ、でもあっちって中等部の校舎じゃない？」

「まあ、確かなのは制服と校舎のどちらかを間違えたということね。

それと、私達は今朝練中だってこと！」
「ふぁい……なんだって始業式から……」

――そんな会話が為されているのは露知らず、桂木夕葉はメモを両手に自分の番号の下駄箱を探していた。

夕葉と始業式

結論から言うと、桂木夕葉は初日から大いに遅刻した。
学校に一時間前に着いていたのでは全く不十分だったのだ。

彼女が自分の教室の席について二十分も経ったところで、同じ席の人が現れた。
ぽつぽつと居た人とも自分の制服だけどこか違うので少しおかしいとは思っていたのだが、この『同じ人』の登場によりおかしいのは自分だということが決定的になり、彼女はすごすごと教室を出て行った。

それから彼女は階段下の見つからないところで泣きべそをかいているところを用務員に発見される。彼女が言われたとおりに学生証を出して見せると、また全く違う場所へと連れて行かれた。そもそも建物からして違えていたらしい。
それで、正しいらしい教室に案内されたのだが。

しかし誰もいなかった。

当然の如く、始業式の為に皆講堂へと移動していたのだ。
しかし用務員さんはそろそろ始業式も終わる時間だというのでそのまま教室で待つことにした。
諭されたのだ。
実際のところ、用務員としては自分の仕事がまだ残っていたし、案内しているのは手間だった。
――もしも彼女が工藤家に関わる人間だと知っていたらそんな手間を惜しんだりはしなかっただろうが。

しかし桂木という苗字は聞き覚えもないし、おどおどした態度を見るに大した家の出でないことは一目瞭然だった。例え新任理事の挨拶を聴きそびれたからと言って、何か困るであろう筈も無い。

……から、――理事長――超……だったじゃん……

がやがやと廊下がざわめいてきたのは、座ってから悠に二十分は経った頃だった。

ぎゅっと縮こまって顔を俯いていた。

がらんと戸が開く。

「一番乗り！――じゃない、あれ？」

顔を俯けていたが、自分の事を言われているのは分かってますます俯く。

「あーっ朝の子！」

その声には聞き覚えがあった。瞬く間に自分の前に脚が見える。二人分。

「ねぇねぇ、名前なんていうの？あ、朝はごめんね。あたし、今村茜！」

「――か、つらぎ……ゆうは」

「な、なんということだ……」

吃驚されたことに吃驚して思わず顔を上げる。神妙な顔をしてまじまじと見られていた。

「君、私と契約して声優になってよ！」
「え」
吃驚してぽかんと口を開けると、急に抱きつかれた。
「もうダメだ……この子持って帰りたい。ねぇ、いいかな葉ちゃん」
「邪魔だ」
答えたのは低い声で、びくりとする。
それと同時にぱ、と放されて視界が開けた。
黒髪で目元涼やかな――瞳の色が空色の、そしてどこか不機嫌そうな男の子がいた。
今村茜はどこかしゅんとして脇によけ、男の子は何も言わずにそこを通って隣の席に着いた。
「状況からして、」
綺麗な子がさらりと言いながらその後ろの席に座る。
「誰が邪魔なのかは明白なのにね」
自分のことが言われたのだと思って竦むが、
「ねぇ、霧崎君？」
と続けられてほっとする。しかし男の子は無視をして面倒そうに頬杖をついていた。

口元に黒子がある――と、ちらりと目が合ってしまって、慌てて目を逸らした。

茶っ毛を短く刈った髪の男の子が現れ、今村茜の背をぽんと叩く。

「茜、何突っ立ってんだよ。席出席番号順だろ」

「うっさい達也。気安く触んな」

なんともつれなく言って、今村茜は自分の席へと戻っていった。

「いなかったな？」

うぐ、と黙って俯いた。始業式のことだ。

そうしていると、顎を掴まれて強制的に向かされる。

「あまり反抗的な態度を取るなよ、桂木夕葉――お前が約束を守らないなら、当然約束は『白紙』に戻す」

外す術なく視線を合わされて、その瞳の冷たさを知った。そうしてどこか音楽の一節でも口ずさむような調子で囁く。

「日々谷陽介の脚は何時だって壊せるんだからな？」

行け、と言われたと同時に彼女は背中を向けて走り出した。

部屋に入りベットに潜り込み、声を押し殺して泣いた。

隣の席の男の子

「教科書、忘れたのか」

こくんと頷いた。

正確には忘れたのではなくどうしたら準備できるのか分からなかったのだが、兎に角彼女はそれを持っていなかった。ただ彼女の色褪せた筆箱を置いて、じっと授業を聞いていた。ノートすらなかった。

しかしその状態が長く続くことはなく、隣の席の頬杖をついた男の子が割と早くに気が付いて、教科書をよこしてくれた。見ないから使え、との事だったが彼女はきちんとお礼を言ってから、若干の間隔を置いて並んでいる机をいそいそとくっつけ、その間にことんと教科書を開いて置いた。彼はちらとその教科書で繋がれた境界線を見ただけで、別に何も言わなかった。

その斜め後ろの席でこの一部始終を見ていた日下葉那（くさかはな）にとっては、全く意外な展開だった。

典型的に、あるいはもっと酷い程度に内気な筈の桂木夕葉が、未だまともに口も訊いたことの無い男子に対して、ごく自然にこれをやってのけたのだ。

しかもこの場合の彼は、特に女子にとっては極めて近づき難い存在だった。それは仏頂面であることとはまた別に、別格の目で見られている為だった。実際のところ、私立修学院高等部の女子生徒の中で何の気圧されもなく彼に口を聞けるのは、完璧に『つり合う』家柄と才色兼備を持つ日下葉那くらいだった。

だが彼女――桂木夕葉にとっては、それは全く自然の行動だった。

彼女が人との出会いで第一印象を覆す事は稀だったが、まさしく彼は例外だった。初めこそ彼女もその他の人に対してと同様以上に彼に怯えていたのだが、机の傍で彼の友人である早川達也とのやりとりが耳に入るにつれ、瞬く間にその緊張を解すことになった。

――彼はサッカー部で、霧崎夭輔と言う名だったのだ。

『サッカー』
『ようすけ』

――これで悪い人の筈がなかった。
彼女は彼が彼女の絶対的な味方であることを一瞬にして悟り、そしてその直感はこの『何も言っていないのに困っている事に気づいて助けてくれた』ことで確信に変わった。
それはまさしく、陽ちゃんが与えてくれる安心だったのだ。

そういう訳で、彼がこれまで終始一貫して無愛想だったにも関わらず、彼女はすっかりと彼に――的を射た表現で言うと、『懐い』た。

ところで彼、霧崎夭輔はこの時を境に突然『夭ちゃん』と呼ばれ出しても初め全く反応を返さなかった。しかし彼女が懲りる気も悪気も全く無かった為に、三日も経つととうとう面倒になって諦めた。
彼の友人さえも『達っちゃん』と呼ばれ、そのことに対しこの友人の方では何のこだわりも見せなかったことも理由の一つにはある。

彼女が何故『達っちゃん』と呼ぶようになったか――
彼女は聞いてしまったのだ。

「高校サッカー界において、『日々谷陽介』の右に出るものはいない」

と早川達也が力説するのを。

そうしてサッカーリーグの開幕初戦から忽然と姿を消してしまった謎について議論が及ぶと、彼女は口をんで断言した。

「陽ちゃんは戻ってきます」

これには驚いて、桂木夕葉が彼の幼馴染であるということが分かると二人とも興味を示した。

実は夭輔がサッカーを始めたきっかけは自分が連れて行った「日々谷陽介」の試合を見てからだ、という話を聞いて彼女は誇らしく、そしてますます隣の無愛想な男子に親近感を覚えるようになった。

幾ら彼が、それは決して憧れなどではなく打ち倒したい為だと言い張っても、彼女はその根底にある尊敬の念をしっかりと感じ取っていた。

何故なら陽ちゃんも、自分が認める選手（度々プロも含まれた）の名を挙げ、いつか同じフィールドで戦ってみたいと言っていたのだ。

彼女は誇らしかった。陽ちゃんは皆にとっても大切で、自分は正しいことをしたのだ。

この高校生活というのは、彼女が考えていたよりもずっと彼女に優しかった。

しかしひらひらのスカートも気にならなくなってきた、入学から一週間後に彼女は大変な思い違いをしていたことを知ることになる。

「お前、教科書を買う気はあるのか」

そう、言われてしまったのだ。
途端に、じわ、と涙がせり上がる。
――買えないのだ。彼女には、もう手に入らないものだった。教科書と言うのは幼馴染のお兄ちゃんからお下がりを貰うもので、彼女にはもうその人はいなかった。

焦ったのは彼だった。

率直な疑問の部分もあったが、彼としても慣れてきて、このよそよそしく馴れ馴れしい少し不思議な少女を、半分からかうような心持で言ったのだった。
それが、一体どういうことなのか桂木夕葉は目に涙を溜めている。
彼が女子を泣かせるようなことは――、あったが、それは彼の自発的な言動に依るものではなかった。そう彼は信じている。しかしこの場合は違う。彼が驚いたのは一つには急に泣き出した桂木夕葉に対してだったが、もう一つにはそもそもそんな軽口を叩いた自分に対してもだった。

ちらほら様子に気が付いて、クラス全体がなんとなく、泣く女子と泣かせた男子に注目を向け始めていた。
そしてまさにその絶妙なタイミングで、背後の席から教室によく通る声が状況を説明した。

「教科書くらい貸してあげたら？霧崎君」

彼は振り向きざま睨み、そして教科書類を隣の席に押しやると何も言わずに教室を出て行った。

……そうしてこの日から、思い出した様に彼女の受難が戻ってきたのだった。

はじめての仮病

『天ちゃん』は全く他人のようになってしまった。

それと同時に、彼女は誰ともしれない悪意の所作――所謂『いじめ』の類を受けるようになった。

その日の午後にはもう、画鋲が靴の中に入れられていたことから始まって、朝学校に来ると上履きの靴紐が鋏で切られていたり、ロッカーには泥が入れられていたりしていた。

それは間接的だった。彼女に直接的な危害を及ぼす者は一向に現れず、そういった行為が際立ってエスカレートすることもなく、ただ単調に、地味に、色々な場所で色々と人の悪意による不都合が起こった。

これに誰もが気が付かなかったというのが最大の不幸だった。

彼女本人が言葉にして訴えない限り分からないような、ささいな、悪戯程度のことで止まっていたのだ。

どうして堰を切ったようにこんなことが始まったのかは分からない。ただ何か、きっかけだったのだろう。

大した家の出でもないであろう平凡で気弱そうな女の子が、『彼』に慣れ慣れしく接している姿は彼女が思う以上にずっと目立っていたのだ。

『日下葉那』なら許せる――家柄も、容姿も、能力も。

二人並べば誰しも溜息吐いてしまう。

皆それを了解して、あるいはそうであるから諦めていたのに、あろうことかその彼女の目の前で、わきまえのない態度を取っている

のは許されるべきことではなかった。
新参者に恥を知らせなければならなかったのだ。

しかし彼女は分からなかった。酷く傷ついた。これまで『居なくてもいい存在』ではあったけれど、明らかな悪意を向けられるようなことは初めてだったのだ。
尤も、それまでにも似たようなことになる可能性は十分にあったのだが、『日々谷陽介』の場合は彼女が『妹』であることを明言していた為にこれを免れていた。
実際に彼らの関係を見るに微塵もそれ以外の気配を感じられなかったし、むしろ彼の前では彼女に親切にしてやる方が賢いやり方だったのだ。

彼女は、受け入れた。

そもそも此処は地獄だったのだ。それを忘れかけていたのがいけなかった。
不機嫌ないとこは怖いけれどぶつようなことはしないし、婚約者だからと言って何か特別な関係になろうという素振りは一切なかった。だからまるで養子に来たような気分にもなっていたのだ。
そんな『浮かれた』気分でいたことと自分の慣れ慣れしさを恥じ、大好きな人の為に引き換えた本来受けるべき受難を大人しく受けることにした。
――しかし遂に、彼女の問題だけでは済まされないことが起こった。

ずたずたに切り裂かれていたのだ。彼女が『借りた』教科書が。

これには青ざめた。
隣の席の男の子が押しやった教科書は所有権が曖昧になっていた。返せる雰囲気は拒否されていたが、かといって別に彼女のものになった訳でもないので持って帰るのも気が引けた。それで、机の中に入れっ放し――所謂置き勉をしていたのだ。
しかし借りている以上、その管理不足は彼女の責任だった。
彼女は朝早く誰よりも早く登校して席についているのだが、これを見ると咄嗟にそれらを自分の鞄の中に押し隠した。

――どうしよう。

親切な持ち主にこの惨状を見せることなんかできなかった。
時を刻むかちこちという音が彼女を脅迫し、遂に彼女は逃亡した。
怯えながら、ほとんど駆けるようにして来た所を逆走していった。
途中誰かとはすれ違ったかもしれないが、彼女は俯いて走っていた。

『家』に帰った。

いつもは車で送迎されていたが、彼女は車窓をじっと見ていたので帰り道は分かっていた。つい最近に七時間も歩いたことのある彼女にとっては、一駅二駅分程は苦でも無かった。
帰ってきて見つからないように――はできなかったので、門の人、お世話の人には腹痛を訴えて自分の部屋のベットに包(くる)まった。
医者を断固として拒否してから、薬やら湯たんぽを持ってきてくれたお世話の人にはとにかく寝たいと言って一人になった。罪悪感を感じ、また初めての仮病にドキドキしながらも一時間も経つともう安心と見て本格的に寝てしまおうとした。しかし甘かった。

『彼』が入ってきた。

「どうした？」と訊かれ、
「腹痛だ」と答えた。
彼は笑って、もう一度訊いた。
「どうして仮病をしている？」
――寝込むような腹痛の奴が、初めての道を走って帰ってくるか？
――尤もだった。
彼女は素直に半身を起こした。
「教科書が欲しいです、朔太郎様」
「自分で買え」とのことだった。
そんなことができるならとっくにしている。
彼女は一銭だって自分のお金を持っていなかった。道で見つけたりしてコツコツ貯めたジャム瓶のお金も、あの運命の始まりの切符代にひっくり返してしまった。
そして病院で婚約をしたその流れで工藤家に連れてこられ、勝手に親の了承を取られてそのまま住み込むことになったのだ。
家に帰る切符代も無いのに、どうしてあの高価な本に手が届くだろうか。
彼女が目を伏せる様子に、彼は少し溜息を吐いて補足した。
「カードをやっただろ」
カード？――なら確かに渡された。彼女は初めて手にした定期券に内心有頂天だったが、しかし毎日車で送迎された為にそれを使う余地はなく、大切にという程ではないが失くさないように引き出し

にしまったままにしていた。

「そもそもこの二週間、教科書をどうしていたんだ？」

借りていた、と答えた。彼は思い切り顔を顰めた。

そしてどこの家だ？と訊かれたので、親切な男の子の苗字を答えると、ち、と舌打ちをした。

「『霧崎』の人間にあまり関わるな」

そう言ってから、――まあ分かった、すぐに手配させよう。と言い、二冊ずつ欲しいという要望にも特に気に留めた風もなく応じた。

そして『カード』がお金の代わりになるという省かれてはいけなかった説明も為され、今後必要なものは世話係りに言うか自分で買うということが申し渡された。

それからちらと目が合うと、買い物に付き合うか、と形式上訊かれたが彼女は慌ててこれを断り、一人で大大丈夫だということを伝えた。案の定「それに越したことはない」と彼も言い、そして恐れていた以上には何事もなく部屋を出て行った。

今日の仮病についてはそれ以上何も言われなかったので、彼女も途中から学校に行って注目を浴びるような事態から免れた。

ようやく安心してボードにちょっと目をやると、さっきは気がつかなかったが薬と一緒にプリンが置かれている。彼女はそろそろと手を伸ばした。

――明日の日曜日に、何かお礼を買おう。

駄菓子屋さんとやつあたり

という訳で、彼女は定期券ではなかったらしい『カード』をぶたさんの財布（小銭入れ）に入れ、お礼できるものを手に入れる為、外に出ていた。

当ても無く家を出た訳ではない。ちゃんと彼女は目星を付けていた。

もしもお金がたくさんあったら行こうと思っていたところ――そこは昨日の帰り道にもあった。

期待いっぱいに店内に入ると、きょろきょろとする。

今日は籠を持った。この籠いっぱいに買い物をするのが、彼女の二番目の夢だった。

それはもう、どきどきしていた。

教科書を何冊も買える程のお金と引き換えになるというのだから、今の彼女には夢も夢ではなかった。しかし同時に、そのどきどきは半信半疑からも来ていた。

――こんなカードでものを買うのなんか見たことも聞いたこともない。

商品券だったら、もっと薄っぺらの紙の筈だった。それにこのエクレアカードとやらは黒くて、なんだか好きになれなかった。しかし嘘を吐いている風ではなかったのを思い出し、気を取り直してちょんちょんと籠に品物を乗せていった。

まずは、ふ菓子。

次には、風船ガム、五円チョコ、金平糖、後は、後はえーと、食べたことはないけど、コーラのタブレットに、四十円もする宝石グミ、きなこの棒に、よっちゃんいか、チロルチョコを全種類と、うまい棒も男の子は好きだ。何味が好きかは分からないけど、全部入れてしまおう……足りるかな、いや足りるはずだ。彼女は今、たくさんのお金を持っている筈なのだ。

彼女の好きなもの、食べたことのないもの、全部全部、籠に入れてとんとレジの台に置いた。おばあちゃんが出てきた。――今まさに、彼女の夢が叶う瞬間だった。

彼女は耳まで真っ赤にして駄菓子屋を出た。何も持っていない。

――何も、買えなかったのだ。

お金をいれる場所に置いたカードを挟んでしばらくおばあちゃんと沈黙が続き、辛抱強く待ったおばあちゃんはようやく、「お金を持っていないのかい」と聞いた。

――嘘吐き。

彼女は泣きそうになってこくんと頷くと、籠を持って元の場所にお菓子を戻し始めた。

それは夢を毟り取られていっているようだった。そんな苦痛を自らの手でやり終えると、おばあちゃんに謝った。おばあちゃんは可哀想に思ったのか、金平糖を二つ彼女の手に握らせてくれた。

くしゃりと皺を作って、また来ておくれと微笑んでくれた。
彼女は泣くのを我慢してこくんと頷き、お辞儀をした。ありがとうと言ったら、ぼろぼろと泣いてしまいそうだったのだ。それから彼女は忘れずに籠を置いて、小さなお店を出て行った。

帰りたくも無い家に帰った。与えられた部屋に戻って、カードを投げた。

本当は、捨ててやりたかった。騙されたのだ。そもそも、何でこんな薄っぺらいものでものが買えるなんて信じたのか、頭の足らない自分が恥ずかしかった。
――だけど、結局は机の元の引き出しにしまった。
もしも捨ててしまって、例えどんなに理不尽なことだって何が『反抗的』に取られるかは分からなかった。
彼女が弄ばれているのは、初めっからなのだ。人を辱めるのが好きなのだ。

その日の夕食、彼女は『婚約者』の顔も見たくなかったし、見られるのも嫌だった。しかし決まりごとなので席には着いて、なるべく早く食べてしまおうとお皿だけを見て口を動かした。

このナイフとフォークも嫌だった。なんでお箸じゃないのか。何でどんぶりじゃないのか。

これまで彼女が受け入れてきた筈の悪意は決してどこかに消えてしまった訳ではなく、ぢくぢくと出口の無い暗室でちり積もっていた。それがちりちりと吹き荒れて、今ここで点火を待っているようだった。
それは彼女も無意識に恐れていて、何事もなく夕食を終わらせよ

うと躍起になって食べていた。のだが。

「どうした？夕葉。そんなに急いで食ったら『また』腹が痛くなるぜ」

――これに。

揶揄する口調に、彼女はかちんと来てしまった。

「……」

何も答えなかった。答えなかったが、しかし脅迫観念から何か答えなければならなかった。

「ゆはは『ゆは』ではありません、『ゆうは』です」

実際、これは前々から気になっていたことだ。男には『う』の発音がきちんとなされていないと感じていた。

――これは重要なことだった。

『ゆは』の呼び方は、お父さんが死んでしまってからは陽ちゃんと自分だけの呼び方だった。だから自分では呼んでいながらも、他人にはこの一文字を欠落して貰いたくなかった。

「――それはすまなかったな、桂木『ゆうは』。俺も名前の呼び違えには辟易した口だ」

彼女は話半分にしてかちゃとフォークを置いた。彼の名前の話などどうだって良かった。ご馳走様でした、と言って立つと背を向ける。しかし。

「待て」

男も静かにフォークを置いて、テーブルの上に手を組んだ。

「他に言いたいことがあるならはっきりと言ったらどうだ、桂木夕葉」

仮にも夫婦になるんだぜ、と言われてかっときたがそれは正論だった。

「――買えませんでした」

彼女は後ろを向いたまま答えた。

「駄菓子屋さんで、ゆははお菓子を買えなくて、あれはお金の代わりではありませんでした！」

――一瞬止まって、それから突然くっくと聞こえた。どうも笑い上戸らしかった。

「駄菓子？そんなもの買える訳ないだろう」

ぼろ、と何より先に涙が零れた。

――そんなじゃない。

駄菓子屋さんで、陽ちゃんはお菓子を買ってくれた。小学校が終わると手を繋いでもらって一緒に帰って、駄菓子屋さんに寄った。それから公園に行って陽ちゃんは風船ガムを膨らますことができて、ゆはは音のなる飴を吹いた。夕日が差すまで遊んで、家まで送ってもらった。一番幸せな時だった。

――『そんな』じゃなかった。
彼女の大切な想い出が、笑いながら踏みにじられたのだ。
「そんなではありません！」
振り返って、涙でぼやける黒い姿を睨み付けて彼女は叫んだ。
「大嫌い！」
そうして後はもう、走って行った。
シーツに顔を押し付けて、それからもう声なんか気にせずに、気の済むまで泣いた。わんわん泣いて、泣いて、泣き寝入った。
彼は黙って二人分のデザート――カラメル・プティングを下げさせた。
『おやつ』の時間、彼女が最も好んだのがこの洋菓子だった。

金平糖が二つ

次の朝は、早く学校に行かなければならないと言って朝食も食べずに逃げるように学校へと出た。今はここに居るよりは学校の方がましだった。

そのくせ車で降ろしてもらった後は校内の雑木林をうろうろしていて、登校に踏み切ったのは比較的ぎりぎりの時間だった。――しかしもっと早くに学校に来ていたら、違和感の連続に迷った末、引き返してしまっていたかもしれなかった。というのも、先ず上靴はきちんとあって何もなっておらず、ロッカーも綺麗なままだった。逆に怖くなるほどだった。恐る恐る彼女は教室のドアを引いた。

――一瞬、空気が静まった気がした。だが後は何事も無かった。席に着く。

「……おはよう、桂木」

隣から、初めて彼の方から挨拶がなされた。

「お、おはよう……ございます」

彼女はおっかなびっくりで答えた。

――そうだ、あの教科書のことを――

ここになって彼女ははたと気がついた。

――あの教科書は？

いいや、あれ、そういえば今朝はどうして鞄が見つからなかったのか。一体いつから……あれ、そもそもあの走って帰った日は何も持っていなかった……？まさか、あの教科書を隠し入れた鞄は――？

「お前のだろ」

差し出されたそれは、彼女の鞄だった。しかし、自分の筆記用具、生徒手帳以外、空だった。あの切り裂かれた教科書は一体どこへいってしまったのか。

――実は、彼女が逃げ帰った土曜の朝、あの後このクラスでは一騒動があったのだ。

霧崎夭輔の教科書が切り裂かれて見つかった。

しかも、その教科書は隣の席の女子――桂木夕葉の鞄の中から見つかった。

大人しげに見えた彼女だけに皆驚嘆したが、確かにそこに入っていた生徒手帳は桂木夕葉の名だったし、その筆記用具入れが彼女のものだと彼も認めざるを得なかった。

また桂木夕葉本人は鞄だけ置き忘れて一向に現れなかった為、その無実を証明できるものはいなかった。

「酷い」

ひそ、と非難の声が上がったのを皮切りに、ひそひそと、そして終いには憚る友達もいない彼女への中傷が野火の如くに広がった。

信じられない
大人しい子に限って
最近霧崎君に素っ気無くされていたから
貧相な顔して、勘違い甚だしい
大体なんで自分の教科書を持とうとしなかったのか
取り入る為に
単に貧乏だったんじゃない
そもそもどこの家の子――

「うるせぇ」

がたんと彼は席に着いた。自分の教科書を取り出して、造作なく自分の鞄に入れた。
声はせいぜい普段より少し低いくらいで決して通る声ではなかったが、その瞬間教室は水を打ったように静まった。

「――あいつじゃねぇよ」

ぼそ、と呟くのも何故か全員の耳にはっきりと届いた。目鼻耳というより肌で判った。

霧崎夭輔は、何か許しがたい怒りを感じている。

誰も微動だにできなかった。声を発するどころか息をするのも苦しい。沈黙の磔刑に課せられているようだった。尤も、誰も何に対する怒りなのかまでははっきりとは判らなかったが。
兎に角もうこの話はこれきりしてはいけないことははっきりと共通に認識された。

「そう言えば、」

女神のような一声。涼やかなよく通る声に教室の空気は僅かに緩んだ。

「今朝桂木さんを見たわ――走っていて、青ざめていたわね。何かに吃驚して逃げたみたいに。――まあ、憶測は無意味だけど」

それから彼女は自分も席に着きながら、前の背中に向けてか続けた。

「霧崎君の持ち物が切り裂かれようと大したことじゃないけど、恥知らずな人間がこのクラスにはいなさそうで安心したわ。それにしても、悪意を持つ人間が悪意を差し向けることと、隣人が救いの手を差し向けなかったことのどちらが罪深いかは一考の余地があるわね？――どちらにせよ、負感情を顕わすのは見苦しいわ。人にしろ、自分に対してにしろね」

――ねぇ、霧崎君？　と締めくくられたが、彼は何も答えなかった。

そうしてこの騒動には決着がついた。

そして一日置いて月曜日の朝――騒動を露も知らない当の本人桂木夕葉が登校し、さらに決定的な出来事が起こった。

「朔太郎様よりお忘れ物を預かっております、夕葉お嬢様」

朔太郎――工藤朔太郎。

財界では前提的に、況やこの学園では絶対的に逆らってはいけない名だった。これは一介の子息令嬢なら――そうでありたいならどんな阿呆でも判らなければいけないことだった。それを工藤家の人間に対して、どこの家の――などと言った輩は、可哀相に卒倒してしまうのも無理はなかった。

衝撃的な余韻を残したまま、執事は帰って行った。そうして机には二部づつの教科書の山が残されていた。

「あの……」

彼女は隣の席の彼に向かってもごもごと言った。

「ごめんなさい、ゆはは霧崎君の教科書を駄目にしてしまったのですが、それで、」

「もうある」

彼は自分の手元にある教科書を軽く振って見せた。そして彼女の教科書群を見て心なし笑ったように見えた。

「よかったな」

彼女は、あ……と頬を染めてから、

「今まで、教科書を貸して頂いてありがとうございました」

とぺこりお辞儀をした。それから制服のスカートのポケットから

何か取り出し、もじもじとして差し出す。

「どうも」

彼はセロハンの二つの包みのうち、一つをひょいと摘み上げた。
それで彼女の柔らかい手の平には、一粒、虹色の包みの金平糖が乗っかっていた。

――こうして、彼と彼女とは『仲直り』することができ、また彼女がうっかり天ちゃんと呼んで慣れてしまうまで、初めと同じくらい時間はかからなかった。

＋

「ごめんなさい」

彼女は残り一つの金平糖を差し出して言った。

「ゆはは八つ当たりでした」

「……」

彼は何も言わずに、その小さな粒を摘み上げてしげしげと眺めた。
砂糖の塊。
原価にすれば一円程度――

「教科書を、有難うございました」

もう用事は終わって背にするが、「この店を、」と呟かれた声に顔だけ少し振り向いた。

「――買い取ったら、お前は喜ぶか」

首を振ると、男もそれ以上何も言わなかったので彼女もそこを後にした。

かきくの御三家

「おはようございます、夕葉さん」

「ごきげんよう、桂木さん」

もごもごと彼女は返事を返しそびれていた。
どういうことだ分からないが、嫌がらせがぴたりと止むとそれだけでなくいつの間にかこういうことになっていた。

桂木、霧崎、日下――

クラスの、下手をすれば学校の『御三家』に数えられてしまっていた。これは『気にする』人間にとっては一大事だった。

「なんということだ……」

ロッカーを開け背を向けているのにも関わらず、彼女に向けて次々と会釈される様を見て今村茜は呟いた。

「逸材だとは思っていたが、まさかここまでとは――」

「ここまでっていうのは、茜も家柄で人を判断する口なのかしら？」

「いやいやそうは言うけどね？『お嬢様』っていう追加要素はやはり見逃せないよ。我侭系と内気系のどちらが王道かっていう議論は置いて、個人的に萌えるのは――」

「黙れ。朝からうるせぇよ、今村」

机に突っ伏していた霧崎夭輔は、騒々しい声に顔を上げ気だるそうな眼を向けた。何故か隣の席に座っていたが、そこは言うまでも無く桂木夕葉の席だった。彼女はすぐ傍にまで来かけていたが、誰か人がいるのでロッカーでものを探す振りをしてごそごそしていた。

「……どけてやれ」

ちらとロッカーの様子を見て言う。今村茜は素直にそこを立つと、憂げな溜息を吐いた。

「ああ、何で今村なんだろう。か行なんて望まないから、せめてそれより後ろの席だったら居眠りなんか絶対にしないのに。尤も、違う意味で涎は垂らすかもしれない。美男美女萌えっ子の完璧な構図に――」

「うぜぇ」

「茜、全然上手いことは言ってないから。ドヤ顔はやめてね」

しかし今村茜は懲りた様子も無い。

今村茜――彼女こそ例外だった。今村商事という中小企業の分際で『あの二人』に対等な口をきいている。しかし、彼女はどういう訳か日下葉那の親友だった。そして早川達也の幼馴染で、彼は霧崎夭輔の数少ない友人であった。為、彼女の不躾は比較的眼を瞑られていた。それに、彼女は明るく人好きするタイプだったのだ。

「霧崎君、自分では蔑んだ眼をしているつもりかもしれないけどそれ逆効果だから。そんなに私を興奮させたいのかな？」

「黙れ変態」

「黙れマザコン」
――と涼やかな声で嗜めたのは『美少女』だった。
「何だと？」
睨みつける様子に動じず日下葉那は微笑んで返す。
「あ、自覚あるんだ？」
「お前こそあるのか？腹黒女」
「あるわよ」
「あるのかよ」
やれやれと彼女――第三者になった今村茜が手を上げてみせる。
「痴話喧嘩は犬も食わないってね」
違ぇよ、違うわ、と揃って返事が返ってきた。
桂木夕葉はちらちら目を向けて、自分が席に着ける機会を伺っていた。
早川達也は朝練後の安眠を妨げられることなく、机に顔を突っ伏していた。

「ねぇねぇ夕葉ちゃん。ねぇ夕葉ちゃん」
――彼女は、お弁当を食べていた。自分の席で、一人で。
しかし隣から頻りに呼び掛けられて向く。今村茜はその席の椅子を借り、机を挟んで日下葉那と昼食を食べていた。昼休みになると天輔と達也はどこかへ行ってしまう。

「夕葉ちゃんと理事長って、どういう繋がり？」
「――いとこです」
嘘ではない。嘘を吐いたことには、ならない筈だ。
「ふーん。いとこかぁ。いいなあ……」
「茜もいるでしょ、いとこ」
「いや、うちのいとこなんてたかが知れてるってもんよ。欲しいのはイケメンの親類」
「茜は節操がないわね」
「節操無くは無い。この学院にイケメン率が高いのがいけない。それに、理事長って未だ十代って知ってた？」
「えっ」
――と声を出したのは日下葉那で、桂木夕葉は吃驚して声も出ず、自分で作ったたこさんのウィンナーをぽろと箸から落としていた。
茜は滅多に驚きを見せない親友の反応に満足し、どこからともなくＡ４のファイルを取り出すとぺり、と捲りそこを読み上げ始めた。
「工藤朔太郎――工藤財閥の御曹司、長男。父は宇宙飛行士、弟は音楽家。幼少期より渡米し、法、経済、政治学などの修士、博士号を取りエリート校を首席で卒業。その後祖父の危篤により急遽帰国。氏の死去、父の不在により事実上工藤財閥の相続者と目されている」
ふっと彼女は目を上げ不敵に微笑んだ。
「この経歴で齢十九という若さ。硬派で物憂げなお顔が大人げ――どうですか？この少女漫画ばりのチートエリート設定は。これでも

節操が無いと？」

「そうね――アメリカ留学なんて誰でもできるし、ハーバートの卒業生なんて毎年何千人もいて、首席だって毎年必ず誰かしらはなるものよ。ハリウッドにスカウトされるだけだったら星の数だけいるし、御高齢のおじい様が亡くなるのは誰にも避けられないことだわ。――家と才と容姿に恵まれた人なんて、結構ざらにいるものよ。まあ多少時運がいいっていうのはあるかもね」

あと多少老けていることも認めるわ、と肩をすくめると、ふう、と茜の方が溜息を吐いた。

「そう、社会の上澄みの上澄みの世界ではざらにあることかもね。まさに格差。しかし金持ちには何故高確率でもれなく容姿と能力も付属されるんだろう。能力者が金持ちになり、別嬪さんをお嫁に貰うという連鎖構造なのだろうか」

「付いてきたんじゃなくて付けるものよ」

「譲って教養はそうでも、容姿は生まれもったものでしょう」

「容姿だって、身に付けるものなのよ」

「うーん、深いなあ。ねぇ、どう思う？夕葉ちゃん」

とんとんと肩を叩かれたので吃驚した。十九というのは耳に入っていたが、話はよく聞いていなかった。

「茜だって可愛いのに、そういう風に見せないでいるのよ。茜のそういうところが好きだけどね」

「きゃっ、告白。ありがとう！そんなことを思ってくれるのは君だけだけどね！」

「そうかしら」

葉那は意味ありげに微笑(わら)った。

プロファイル裁判

「何だこれは」

夭輔は顔を引き攣らせた。戻ってきて机に置いてあった青色のファイル――何の変哲もないファイルを、誰の置忘れかと何気なく捲ってみた後の第一声だった。そして横にちらと目を向ける。止める間もなくはらはらしていた彼女はびくりとした。

「――桂木、知っているか」

その声がなんとなく怖かったので、思わず彼女は首を振った。茜ちゃん達はトイレに行ったのだ。しかし彼がびりと一ページ目を破り取ったのを見て慌てて止めようとする。

「それは茜ちゃんのです！」

「そうか――今村のか」

彼の声は低くなって、彼女は泣きそうになってきた。告げ口のつもりじゃなかったのに。早く戻ってきて――その時。

「あーーっっ」

戻ってきた。夭輔が手にしている青いファイルを見るや絶叫し、走ってきて奪い取る。

「み、みみみ見てないよね？」

「一ページ目以外はな」

彼が破り取ったページをぐしゃと潰すと、彼女は現行犯逮捕された犯人のようにがっくりと項垂(うなだ)れた。

「一体何の権限があって、人の私物を破ったりしているのかしら？霧崎君」

後から歩いてきた日下葉那と霧崎夭輔が見合う。クラスの注目は浴びていたが、別段騒ぎ立てもせず何か見世物でも始まったような雰囲気だった。割といつものことらしい。

「てめぇに言えた台詞か？」

「何のことかしら」

彼はち、と舌打つともう席に腰を下ろした。二人の間に立ち挟まれていた桂木夕葉は心の底からほっとした。しかし日下葉那は親友への非礼を許さなかった。柔和な微笑みを消し切れ長の瞳は冷たい。

「何様のつもり？茜に謝りなさいよ」

「い、いいって葉ちゃん……――そりゃ、写真の一枚でも追加できたら嬉しいけど。できればコスプレして」

後半をちら、と期待した目で伺われて、彼は思い切り睨んだ。

「ふざけるなよ」

「はい、すみませんでした」

自分を挟んで行われるやりとりを彼女――桂木夕葉は概ね理解していた。そのファイルは茜が［イケメン☆プロファイル］と呼んでいるもので、『特別に』自分にも見せてもらえたものだった。それには男の人の写真が貼られ、下に名前が書かれていて、他に身長や

体重（推定も含まれる）が載っていて、その情報量は人によって異なるが経歴や趣味、さらには時間別目撃分布図まで書かれているものまであった。

霧崎夭輔の名前はその一ページ目に載っていて、正確には分からないが、その情報量も他に比べて多い気がした。彼女もそのページには比較的興味を持って読んでみると、彼の父親が外交官で母親はフランス人であること、中等部までは剣道部に所属していて個人部で全国三連覇を果たしていたこと、などが分った。

よって彼女も共犯だった。彼が望まないやり方で彼を知ってしまったのだ。

しかし彼女には名乗りを上げるだけの勇気は無かった。それで茜には悪いと思いながらも、彼に関する事項が実は一ページ目だけではなく他にも結構に及ぶ写真ページが存在することは黙っておこうと誓った。

――しかし。

「その言い方だと他にもありそうだな。貸せ」

「ええ、いや、待って、これだけは！身長体重経歴その他は記憶しているけどネガは持っていないのでこれだけは！」

「気持ち悪ぃんだよ、捨てろ！」

彼がまさに取り上げようとした時、しかし前に立ったある一人によってそれは阻まれた。

ばさりとファイルが落ちる。――そこに立っていたのは日下葉那ではない。

「達也――？」

「その言い方はないだろ、夭輔」
「全く信じられない横暴さね」

彼の方でも信じられなかった。自分が悪いのか？
自然と、『彼女』の方へ視線が向いた。一部始終を見ていた、公平な裁判者を。
自分に視線が集中した小法廷で、彼女はおずおずと答える。
「――大切にしているものを取るのは……」

――愕然としたが、まだ言い分はあった。
偶然か高確率か該当ページが証拠然と開いている。ほとんどが彼の視線が向いていない、身に覚えのないものだった。

「盗み撮りしたものでも？」
「盗み撮りじゃないわ」

すぐ様それは否定された。ネガは持っていないって言ったわよね？と勝ち誇った微笑で指摘されてから、
「体育祭、修学旅行、全国大会、授与式……全部、学院が行事の記録にカメラマンを雇って写真を希望者に売り出していたもの（競り落としたもの含む）よ」

三人が彼を向き、一歩出た弁護人が余韻たっぷりに告げる。
「あなたがこの修学院高校に所属している以上、何の違法でもないわね？」

彼は敗北した。

その午後中、夭輔はむすりとしていた。

夕葉は結果的に茜側に味方してしまったこと、いつも彼が（彼女からすると）自分の味方をしていてくれたことを考えて非常に申し訳なく、居づらかった。話しかけるのを控えて小さくなっていた。

しかしそのまま七限目が終わり、放課後の鐘が鳴り、彼が達也を待たずして教室を出ようとするのを見るともう耐えられなくなってぎゅっと彼の袖を掴んだ。

「何だ？」

彼は訊いたが、彼女はなんと言ったらいいか考えている最中だった。

「――俺、部活行くから」

「待ってます」

――は？と怪訝に見やるとなんだか必死な様子で見上げてくるので少し笑ってしまった。

「暗くならないうちに帰れよ」

夭輔は軽く振り払い教室を出て行った。

――彼は桂木夕葉の案外な頑なさを未だよく知っていなかった。

放課後サッカー部

果たして夕葉は待っていた。
グラウンドを、石の階段に座って眺めていた。
お迎えに来た人達には、きちんと断った。自分で帰れると言うと、帰る時には連絡をして欲しいと携帯電話を渡されたが、強引には連れて帰らなかった。あの人たちは悪くないのだ。

夕暮れ時になる。朱色であたたかい、気持ちのいい光。グラウンドには色んな掛け声が色んな方向から聞こえる。みんな、頑張っている。

天ちゃんを見つけた。
陽ちゃんよりずっと下手だ。
皆の方には混じらずに、一人でドリブルをしている。
多分、まだ混ぜてもらえないんだろう。
それなのに、彼女は直感的に分っていた。
陽ちゃん、今はどうしているかな。早く、早く脚を治して練習に戻って。
誰にも負けないで、陽ちゃん。

打ち負かしてやるなんて言ったのは、嘘や大げさにはならないことを直観していたのだ。
まだまだ――ずっとまだまだだけど、あのドリブルは昔の陽ちゃんと重なる……
それも、彼女がずっと見てきた彼の成長を早送りで見ているように……
汗。
夕日に光って散る汗を見て、ぎゅっと手を握った。

いつの間にか、真っ暗になっていた。
星も出ていた。
ナイターの光の下、漸く選手達が集合した。そして先生の話を聞いて、礼をして、解散した。整列がばらばらと散る中、彼と目が合った気がしたがすぐにふいと視線は外された。
それからだんだん大きくなって、彼女の横を汗をかいた部員達が通っていく。
皆、大抵彼女の方を訝しげに見ていった。ちょこんと、中等部のようでそうでないと分って、なんだろうという感じで過ぎていった。
『追っかけ』と分ったらグラウンドを締め出されるのだが、どうも彼女にその雰囲気はなかったのだ。

――あれ、と思ったが、そして彼はいなくなっていた。
一応、見ていたつもりだったのだが通りかかったら声を掛けてくれるだろうと思って油断していたのだ。ごたごたしていたのでもしかしたら彼も立ち止まれなかったのかもしれない。
彼女は困ってしまった。
グラウンドにはいないので、皆と同じようにあの建物（部室）の中にもう入ってしまったのだろうと思えた。
それで、夕葉はとたとたと急ぎ足に明かりが漏れる建物に向かっていった。
それは勿論、知らない人がいっぱいいるところへ向かうのは彼女の想定外だったが、グラウンドはなんだか急にしんとしてしまってそこに一人でいるのは怖かったのだ。
それに、彼に気づいてもらえればあとはいいようにしてくれる筈だった。

ぱたんとドアを開けた。

そしたらいきなり部屋になっていた。
ずらりとロッカーが並び、半裸の男の子達が着替えをしていた。汗くさかった。鼻がづんとする。
手前の方では、何か時間が止まったようにじっとしてこちらを見ていた。吃驚した。
何で皆こっちを見ているのだろう、と思いながらくりくりと目で夭ちゃんを探す。

「な……」

誰かが何か声が詰まって、それからがたいのいい男の人が前に現れ視界を塞いでいった。
それは実際には一二秒のあっという間のことだったのだが、彼女にはゆっくりだった。摘み出される前に摘み出そうとする動きが視えていたが、如何せんそれに対応できる筋力が彼女には無かったので、あっさりと摘み出されてしまった。

――思わず顔を見合わせて、達也と夭輔はぎくしゃくしている場合ではないとの無言の一致を得た。

夕葉とキャプテンとサッカー問答

着替えも半端に急いで二人が部室を出ると、半べその夕葉と、彼らのキャプテンが少し困った様子でいた。迷子とおまわりさんのような感じで口元が変に引き攣りかけたが、ここでは先輩後輩の上下が為されていたので彼らは表情筋を正して駆け寄った。

彼女はぱっと顔を輝かせた。

「夭ちゃ――むぐ」

忽ち口を塞がれる。何故か知らん。

「知り合いか？」

「自分達のクラスメイトです」

背筋を伸ばして起立し、これは達也が答えた。

「サッカーを見るのが好きなんだよな？」

夭輔に口を塞がれながら訊かれたが、これは本当だったのでこくんと頷いた。

「ほお」

キャプテンは自分の顎を摘みちょっと面白そうな顔をした。彼は本当にサッカーが好きだったので、それに理解を示されるのは気分が良かったのだ。それも、サッカーのルールすら露も知らなさそうなこの小さな（彼にはせいぜい中学一年生くらいに見えた）少女に。

「それで、ずっと見ていたんだな」

キャプテンも気づいていたので、すぐに信じた。それ以上には全く期待していなかったが、試しに聞いてみる。

「どうだった？」

仕方なしに夭輔は塞いでいた手を離し自分も起立した。そして彼も少し、しかし先輩よりはその答えに興味を持った。

一応、日比谷陽介という高校サッカー界の新星を間近で見てきたのだ。目は肥えているだろう――本人が意識はしていなくとも。そしてこの学院には、推薦（スカウト）で集まった優秀な人材が一学年一チーム作れる程に豊富で、勿論設備も充実していた。誰だって、キャプテンの期待通りの驚きと敬意を見せるはずだった。

彼女は、んと少し迷ってから答えた。

「あまりうまくいっていません」

冷えた汗が背筋を垂れた。達也も夭輔も。

「ほお……どこがうまくいっていない？」

思ったとおり、キャプテンの機嫌には水を差していた。忽ちに一オクターブも声が低い。

「――桂木、時間は大丈夫か？」

「もう迎えが来てるよな？」

なんとかそう言った。先輩の手前口を挟むのは気が引けて、これが彼らにできる精一杯の処方だった。しかしキャプテンの方ではこのまま帰す訳にはいかなかった。自分のチームに全情熱を傾けていたのだ。幾らサッカーがよく分っていない人間にでも、適当に非難されてそのままにはできない。

しかし彼女は正直だった。

「髪のくるくるの人と鼻が変な人の間で道が切れています。ボールを止める人は前と後を考えていません。攻撃はみんな攻撃です。茶色い人は――ん」

また彼女は口を止められてしまった。今度は達也の手で。しかし何故かさらにその手は夭輔に外された。

「喋っているだろう」

「――鼻がむずむずします。点々で、ぐにゃぐにゃです」

と言って、彼女はしまいにくしゃみをした。

キャプテンは、呆気に取られていた。

何故かと言うと一笑に付すには脳みそのどこかを痒く引き止められて、考え考えして謎謎を解くように色々と当てはめてみた。そして、遂にぴいんと来た。

「ほお……ほおほお」

興味深気に彼女を見る。

言葉は幼いが、コーチの言っている事と通じるものがあった。それも、たった一日の練習を見ただけで。

それで今度は真面目な顔になって尋ねた。

「――一つだけ直せるなら、何を直す？」

「ようちゃんがいません」

即答だった。しかしなんだかよく分らなかった。

「日比谷陽介です。彼女は幼馴染だったそうです」

と、達也が補足する。それでキャプテンは不思議な少女に何かの合点がいったようだった。だが同時に笑い出してしまう。

「日比谷陽介……日比谷陽介か。確かに、あれが欲しくないチームはいないだろう。だがな、そういうことじゃないんだ。万が一にでもあれを引っこ抜けても、そういうことじゃないんだ。このチームなんだからな」

「――こいつが言いたいのは、」

黙って聴いていた夭輔が口を開く。

「軸がいないってことだと思います」

――キャプテンは彼を見た。生意気だと思った。この一年坊はサッカーはやり始めたばかりだった。

何かの武道では成功したらしいが、そもそもスポーツの『乗り換え』が理解できなかったし、こういう何にでも成功できると思っているような万能タイプが彼は好きではなかった。サッカーをする資格は『そういうこと』じゃない。ちやほやされなければすぐに辞めるだろう――と、春練に来ていたときからずっと、彼には一度もフィールドを踏ませずにいた。

「けれど、たぶん、」と彼女は続けた。

「ようちゃんがいます」

これは達也もよく分らなかったので補足できなかったが、天輔の方はちらと彼女と目が合った。

はじめてのお友達

折角だったが、彼女が意気揚々と案内してあげた駄菓子屋はもう閉まっていた。

このお店は彼女の秘密の場所で、あの時以来ちょくちょくと行っては賞味期限の切れたもの（つまり相当に古い）を貰っていたりしたのだ。

彼にはここが素敵な場所だと分かるはずだった。あんな風に、馬鹿にしたりなんかはしない。

彼女はなんとしてでも今日彼を慰めなければならなかったので、シャッターが閉められていても諦めなかった。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

とんとんと戸を叩いた。

夭輔は驚いた。突然裏手に駆けて行って、呼び始めたのだ。どうやらここは彼女の祖母宅らしい。

『おばあちゃん』は出てきた。割烹着を着て手を拭きながら出てきた。奥から炊き込みごはんのようないい香りがして、彼女はくんくんと鼻を鳴らしていた。

「おばあちゃん、お店を開けてください」

「はいはい」

と祖母らしき人はにこにこして中に入っていた。彼女は夭輔の手を引いて行って、シャッターの前で待った。すぐに彼はその手を離したが。

そしてがた、がたがたとつま先の方で言うので、彼は腰を屈めてそのシャッターを外から押し上げてやった。

「あらあら、ありがとうね」

彼女は自分が連れて来た親切な男の子を誇らしげにしていた。

「今日はもう来ないと思ったよ」

『おばあちゃん』はむしろ彼女に手を引かれながら店へ引っ込んでいった。突っ立っているのも何なので彼もその後に続いた。

「へぇ……」

興味深そうに夭輔が辺りを見回していると彼女はかなり得意げにした。

「夕葉ちゃんのお友達かい？」

この店主も興味深そうに彼を見る。夕葉はどぎまぎして問われた彼を見ていた。

「ん……まあ」

そう言った瞬間に彼女は顔を綻ばせ、あまりに嬉しかったので恥ずかしくなって下を向いた。顔が満面の笑みになるのを止められなかったのだ。

もしかしたらと思っていた。だけど、本当に、本当に――

彼は彼女の初めての友達だった。

「送っていく」

駄菓子がたくさん詰められた茶色の紙袋を持って、夭輔は言った。
彼は人からの貰い物を無碍に断る名人（毎年ある時期に鍛えられた）だったが、この場合は桂木夕葉が勝利していた。
彼女はそれが彼に贈呈されるのを見るや否や、祖母に笑顔で抱きついて『ありがとう、おばあちゃん』と言ったのだ。ずっと欲しかった玩具を買ってもらった子供よりも嬉しそうだった。きっとひどくそうしてほしくて、しかも期待以上だったのだろう。
丁重な断り文句を言いかけた彼は、それを見て流石に返すのはよした。

それにしても彼女は今まで見た事がないほどはしゃいでいた。

今まで、と言っても数週間程で何を知っていた気でもなかったが、それにしても、という感じだった。学校にいる彼女は彼女の本当ではないのかもしれない。今ここにはいつも何かに怯えたようなびくびくした姿は無く、感情豊かで人懐っこい少女がいた。

そうして夜道を歩いて暫く経つと、工藤家の塀が見えてきた。
なんとなく、この辺でいいかなと彼は思った。
沿って歩いていけば迷うことはないだろうし、警備もしっかりしているだろう。
それに――余り接触しない方が無難だ。

元々霧崎家は貴族だとかの末裔で、代々新興財閥とは馬が合わない――とどこかで聞いた。要するに、きっと家柄を鼻に掛けているので新興系の『成金』には煙たがられているのだろう。しかし霧？の家は歴史的に培ってきたという各界への繋がりがあるので無碍にはできないし、霧？の方でも無視は得策ではなく、表面的には仲を保っているのだ。

――まあ、どうでもいい。

「じゃあ」

と特に予告なく立ち止まった。遅れて、数歩先に進んだ夕葉が止まって振り返る。

彼女が口を開きかけた時――

「夕葉！」

背後から突如男が現れた。声にびくりと背を震わせる。夭輔も急に現れた男に多少驚いた。黒いジャケット姿だった為に暗闇に紛れていたのだろう。

「お前、こんな遅くまで何をしていた！」

父親か。いや違った、理事だった。

今日のあのふざけたファイルの破り取ったページの次に見た気がする。興味も無かったから不確かだが。彼女は「いつもの」彼女に戻っていた。おどおどして目を行ったり来たりさせている。むしろその落ち着かなさは段違いに酷かった。

泣き出しそうにしていて絶対に要領を得なさそうな彼女を放って男は自分をじっと睨み付けた。

「――霧崎の人間だな？」

だからなんだ、と流石に彼も理事長に対して喧嘩を売るような口を聞きはしなかった。

「教科書を貸して貰ったそうだな――今日のところは不問にしてやる」

この偉そうな態度。決定的に彼はこの理事とは相容れない存在だと悟った。あいつを彷彿とさせる――

「行け」

言われなくとも、と背を向けた。初対面の人間にここまで嫌悪感を覚えるのもおかしいかもしれないが、桂木夕葉とは反対の意味で昔から知っていたような感覚を受けていた。

それにしても。

少し違和感も感じた気がした。彼はそれ以上は考えはしなかったが、無意識ではその正体を朧にも捉えていただろう。そうでなければ、可哀想な『友達』をそのまま置き去りはしなかったに違いない。

――彼が考える程の横柄な人間ならば、人を怒鳴りつけるのは椅子に座ってするもので、わざわざ自分で出向く必要はない筈なのだ。

ぱん、と張られた頬を押さえる。
涙を零すより先に、唇を噛んだ。
何で――
彼女をぶっていいのはお母さんだけだった。
知らない人がぶつのはいけないことだ。
陽ちゃんだったらきっと怒る。
――陽ちゃん
ここで彼女はじわ、ときた。……そうだ。彼女は、もう彼のものだった。彼女をどう扱うかの権限は、彼が買い取っていたのだった。

「ごめんなさい……」

はっとして、彼は手を押さえた。

「っ……――」

何か言いいかけて言わず、黙った。もしかしたら何か微かに言ったかもしれなかったが、彼女は俯いていたので唇が僅かに動いたことも知らなかった。

「――遅くなるなら、」

それからまた黙り込み、ち、と舌打をするといつもの鋭い眼で彼女を見下ろした。

「門限は六時だ。遅刻は認めない。帰りは必ず車で帰れ。――以上」

きっぱりと事務的な口調に戻って、行け、と言われて彼女ははいと返事をし退室した。

扉が閉まった後の男の溜息は誰にも聞こえなかった。

雨天の昼休み

「6時――！？」

今村茜は吃驚してみせた。

昼休みだった。

教室の人口密度が若干高いのは五月雨が屋上庭園その他の屋外弁当スポットを濡らしているからだろう。今村茜や日下葉那といった昼に教室を出ない人間に取ってはあまり関係がないことだったが。ちなみに桂木夕葉も別段当てもなかったので教室に居残っている人間だった。

「ざらよ」

日下葉那はさらりと髪をかき上げて言った。

「またまたぁ。だって高校生だよ？女子高生。帰りのアイスは？この七八限まである鬼畜学院から解放された後、どこでどう遊ぶの？」

「あんまり遊ばないんじゃないかしら。ゲーセンとかでは」

「そうね。ごめんね。悪い遊びを教えて。日下葉那にゲーセンなんて俗な言葉を吐かせて」

「その拘束が嫌で部活に入った、というのも一つにはあるわ」

「うーん。愛されているんだね、うちなんて門限のもの字もないもん。心配どこいった」

「確かに心配されてるわ。忙しいのに誘拐でもされて煩わしいことになったら、てね」

ううん、いやそんなことはない、と言ってから話を前の席の少女に振った。

「ゆはりんは何時？門限」
「六時です」
しっかりと会話を聞いていたのがばれていたのではないかと内心焦りながら答える。
「はっああ……そういうもんなのかね、令嬢っていうのは」
「ゆはは昨日からです」
「ふーん……」
何故かくすりと日下葉那は笑った。
「昨日、霧崎君に何かされたの？」
「はあっ！？」
と勢いよく振り返ったのはその人本人だった。彼も雨天の為に教室で昼飯を食べていた。
今村茜は日下葉那の隣の席に座り、早川達也は霧崎夭輔の前の席に座っていた。そして彼女は自分の席――それらの丁度真ん中の位置に座っている。時々前からも後からも話しかけて貰えるので、なんだか囲まれて、一人でご飯を食べているのではない気がして彼女は少し雨を喜んでいた。今日という日はこれで満足だった。
「勝手に人の話を聞かないでくれないかしら？霧崎君」
「勝手なこと言ってんじゃねぇよ、日下」
「だって、」

凄まれたところで物怖じもせずに葉那は言った。
「達也君が言ってたわよ？昨日霧崎君が桂木さんを送っていった、て。それでその後中々帰って来なかったとか」
「何で俺の帰宅時間が分かるんだよ」
これには前の席で置いてけぼりだった達也が答えた。
「お前んちのお袋さんから電話が来たんだよ。帰りが遅いけど何か知らないか、て」
彼は深い溜息を吐いてもう前を向きかけた。が、
「はい！何で夕葉ちゃんを送っていったのか凄く気になるんですが！」
と茜が手を挙げて言った。
「面倒くせぇ」
と彼はそのまま前を向いてしまった。
「うー……なんだよ、なんだよ、私もゆはゆはをお送り申し上げたかった……決して不埒な考えではなく」
「そっち？」ときちんと葉那がつっこんだ。
「霧崎君」

と彼が教師に呼ばれたのは話題が終わりそうだったそんなタイミングだった。

「理事長に呼ばれているから行って来なさい」

「え！」

と一番の反応を見せたのは霧崎夭輔でも桂木葉那でもなく、今村茜だった。

「先生、それ私が代わりに行ってもいいですか！？」

「――じゃ、霧崎君。早めに頼むよ」

そう言って教師はそそくさと出て行った。

「あれスルー。完全スルー。何で？」

「『不埒な考え』が顔に出てるからじゃない？」

「何で？尊敬する理事長先生を間近で拝見したいと思うのがそんなにいけないこと？愛学精神でしょ？」

「ってか理事長って学校に来てたんだな。始業式の初っ端から『お飾り』発言してたのに」

「寄った、て感じね。見ない車を見たもの」

外野が喋っているのを他所に夭輔はくしゃと牛乳パックを潰して席を立った。

「あら、行くの？」

「――ああいう奴は、自分の思い通りにさせないと余計面倒事を仕向けてくるんだよ」

くす、と葉那は笑った。

「全然違うわ――あの人とは」

彼は何も言わず教室を出て行った。

「――さて」

今村茜は時計をちらりと見た。昼休み終了まで残り5分程――

「ちょっとトイレにこもってくるので、授業に遅れても悪しからず」

そう言って彼女も教室を出て行った。

微妙な間柄で縦一列になってしまうともう会話は生まれず、残された者達は雨音を聞きながら思い思いに残りの休憩を過ごすことになった。

婚約者のお迎え

さあさあという雨音がその理事室の静寂を際立たせていた。そこには二人の男以外誰もいない。睨み合うように対峙する彼らは、その瞳孔に互いを映したまま決して外そうとはしなかった。

――張り詰めた空気を切り裂くように、遂に一人が口を開く。

「――なんの用だよ」

「分かっているだろう？霧崎夭輔」

自分を睨み上げてくる生徒を真っ直ぐに見返し、未だ若い理事長はくすりと口端を上げた。そうして余韻たっぷりに告げる――

『生意気な生徒には教育的指導が必要だからな――』

『なっ……お前――』

「――何一人でぶつぶつ言ってんの、茜？」

「うわあえっ」

鍵穴を覗き込んでいた今村茜は、背後の冷ややかな声に飛び上がった。

「――はっきりさせてほしいんだけど」

と日下葉那は幾分呆れた様子で親友を見やる。

「一体どこからが茜のモノローグ？　該当部分の始まりと終わりの１０字を抜き出しなさい」

「『さあさあという雨音が』から、『――なっ……お前――』までです」
「全部ね」
「だって、聞こえないんだもん！それに美青年が向き合ってたのは事実だもん！妄想するでしょ、そりゃ！」
「もん、じゃないでしょ。行くわよ、ほら」
「やだあ。まだ見たいー。心のフィルターへの現像完了まで推定あと二十分」

腕を掴まれ引きずられるようにドアを離れた時、丁度それは開いた。
駄々っ子が引きずられていくような構図を見て取り夭輔はまだ軽い方の溜息を吐いた。

「――何をしているんだ、お前は」
「あ、お前呼びってなんかいい」

煩わしそうな目で見やって彼は越していく。その背を見て茜はきちんと自分の足で立つと友人に目配せした。

「ねぇ葉ちゃん、さっきの独り言（及び妄想）は霧崎くんに内緒にしてね」
「言いたくも無いわ」

――そのころ、桂木夕葉はまごまごしながら頼まれた言付けを伝えていたが、「トイレにこもって」という事由は日下葉那においては全く信じられず、従って今村茜も嘘ということになってしまい、可哀想に、まるで彼女がそういう理由を告白したかのような恥ずかしい目に合うに終わっていた。

「で。結局何の用だったんだ？」

早川達也が訊いてきたが、隣背後が耳を澄ましていたのははっきりと感じていたので夭輔あっさりと「別に」と答えた。

「――期待するのはいけないと思うんだけど、」

涼やかな声が背後から問いかける。

「もしかして退学を申し渡されたのかしら？」

「期待させて悪かったな」と彼はぶきらぼうに答えた。

話す気は無さそうだった。しかしお隣さんの夕葉は問い匡すこともせず大人しくしていた。自分には後でこっそりと教えてくれるだろうと彼女は思っていたのだ。

＋

ぱさん、と夕葉は紺色の折りたたみ傘を差した。

大きかった。

それは男物で、友達の夭ちゃんが貸してくれたのだ。

二本あるらしい。

校門までの距離だったが（と言っても歩いて十五分はかかった）貸してもらうことにした。彼女は友達と一緒に学校から帰ってみたかったが、彼は部活（室内で筋トレ）があるというのだ。

土曜日は早くに授業が終わるので待っていても六時前に帰れそうだったが、昨日の今日なので大人しく帰ることにした。お迎えの人にもあまり迷惑はかけたくない。

はたからみると傘が歩いている程に隠れながら、桂木夕葉は門に向かった。

しかし待っていたのはお迎えの人ではなかった。

「乗れ」

彼女の婚約者――という名の絶対君主だった。

嗚呼、顔は隠れていた筈なのに！

雨のドライブ

「乗れ」

男は灰色の眼をちろりと流して言った。

右手のドアが開く。抗いようはなく、夕葉は男の視線を避けながらもおずおずと乗り込んだ。それも後部座席ではなく助手席のドアを開けられたので、彼と並んで座ることになってしまった。

すぐ隣にいる。それだけで変な汗がじわりと浮かんできた。こんなにも逃げようのない空間で二人きりになったのは初めてだった。ギアががちゃがちゃ言う度に、夕葉は心臓を跳ねさせていた。

一体何の用事があって学校に来たりなんかしたのだろう。それが昼の友達への呼び出しに関係がありそうで彼女は訊いてみたかったが、勿論彼女に話しかけられる勇気などなかった。

「学校はどうだ」

「きちんと行っています、朔太郎様」

それだけで沈黙してしまって、後はもう雨中を走る車の音に耳を澄ましていた。

キッ

キーという雨のブレーキ音を聞いていた。車が止まる。しかし窓を見ても、そこは彼の家ではなかった。

だけどぱたんとドアが開く。彼はいつの間にか外から回って彼女のドアを開けていた。出ろということなのだろう。仕方なくよいしょとお尻を上げた。手が差し出されていたが、勿論そんなことをし

てもらわなくても彼女は車を降りることができる年齢なので、わざわざ彼の手を患わせることなく路上に下りた。

連れて来られたのは、服のお店だった。

スーツの人たちに囲まれて何か次々と服を持って来られたが、彼女は上の空だったのであまりよくは覚えていない。上の空と言うか、何か他人の目で見ているようだった。これが『自分』の日常だとは思えていなかった。

ぶんぶんという都会の大きな車道、そよそよともしない並木達、かつかつ歩くヒールの人達、金字のアルファベットで書かれた店がずらりと並んだ冷たい通り。

――覆ってしまっている。コンクリートで。メッキで。雑踏で。

群がる人達に何か着せられ何か脱がされて、ようやく試着室から出られた。

ぽけっとしていたが、男が黒革のお金受けにあのカードを置くのを見た。ちょっと気味が良かった。彼は本当に知らなかったようだが、あれではお金の代わりにはならないのだ。

しかしそれは少しも眉を顰められることもなく自然に受け取られた。それを持って行かれて、間もなくまた戻ってきて返されてサインをすると男はそれを財布にしまった。そうして買い物ができてしまったのだ。

――何で自分だけ。

買えなかったのか、彼女は理不尽な気持ちに襲われていた。多分、彼がそう仕組んでいるのだ。

それは二度繰り返されて（隣の隣の隣、次は宝石店に行った）漸

く彼女は車に戻された。

やっぱり天ちゃんの帰りを待っていれば良かった。

貴婦人の服たち、マーメイドの飾りたち。

それらは彼女の為のものではなかった。どうでしょう、と訊かれるのは自分でなく決まって男で、彼女はただのマネキンだった。自分はそうだと知っているけどもどうしてこの人たちまでが知っているのだろう。――いいや、みんなが初めから知っていた。彼女の意見に意味があると思っているのはいつだって陽ちゃんだけだったのだ。

も一度ぱたんと閉まったドアの中で、男が訊いた。

「どこか行きたい所はあるか？」

「いえ」

そして家に着いた。彼の家。

部屋に帰る前に、男が腕時計をちらと見る。

「着替えて待っていろ」

一体何に着替えるのか分からないが、部屋に戻るとテーブルの上に白い箱が何個か置かれてあった。開けると、ドレス。靴。バッグ。

突然のプレゼントの雨霰に遇い彼女が感じたのはしかし喜びではなく、ただ得も知れない不安だった。

『契約履行』の日

「お腹が痛いです」

彼女は言いつけどおりそれらにすっかり着替え終えていたのだが、しかしお手伝いさんが一褒めし、彼女の婚約者を呼びに出ようとしたところで咄嗟に訴え出た。

「ゆはは、寝ていないといけないと思います……朔太郎様に、伝えてください」

無論仮病だった。しかしお腹を押さえてその振りをするとなんだか本当にお腹が痛くなってきた気がした。

無意識に拒否していたのだ。「何か」起こってしまうことを。

ただ夕飯を一緒にするのにドレスに着替える必要があるだろうか。多分、またどこかに連れて行かれるのだ。それだけでも息が詰まる思いがするのに、もし……

「婚約者」という割りに彼は特に何もそれらしい振る舞いはしてこなかった。無関心という訳ではなかったが、それは霧崎夭輔が感じたように一見してただの保護者だった。そしてそれは彼女にとっては不幸中の幸いだった。

だがもしも、彼が気まぐれに「その気」になっても彼女は文句を言える立場ではなかった。自分を売り払ってしまったのだから。

約束という意味において、彼に悪いところは一つもなかった。

十分にそれを守っていたのだ。「治す」ということは初めの手術だけで終わることはなく、日比谷陽介はそのままアメリカでリハビリを受けていた。それもプロのスポーツ選手が受けるような最高水準の環境で。栄養管理、トレーナー、精神面、他全て最高の人事が尽くされていた。彼女が思っている自分の代価三千万など初期費用に過ぎなかった。

そこまでは知らなかったが、彼女には契約者として受けるべき定期的な経過報告がきちんと為され、その順調に喜び、また彼の律儀なまでに徹底した手腕を認めざるを得なかった。

しかもその厚遇は彼個人の日比谷陽介への同情や投資に依るものではなくただ契約の遂行であることも分かっていたので、彼女の方でも感情に関わらず「契約」は履行しなければならないと知らしめることになった。

それでも彼女は逃げることにした。

いずれはきちんと受け入れるつもりでも、まだ彼を恋人として見るには時間が浅すぎたのだ。

躊躇う素振りのお手伝いさんを置いてベットの中に潜り込んだ。ドアの鍵は彼女に管理できるものではない。外から掛けるものでお手伝いさんが夜に見回りにきた時に戸締りをした。そのかちゃりという音を聞く度に、毎晩毎晩彼女は捉われの身を自覚するのだった。

「夕葉、」

しかし彼は来てしまった。こんもりと膨らんだ布団を見、椅子を引いてきて傍に座る。

やはり彼女はそのまま隠れているのは「契約違反」に当たる気がして、半身を起こした。

「腹が痛いのか？」

案外に彼は怒ってはいず、心配そうな声音だった。彼女は自分の罪に苛まれながらもお腹に手を当ててこくんと頷いた。その申し訳なさげな様子が真実味を与えていた。

「薬を飲め」

そう言って彼はお手伝いさんが置いていってくれた薬をよこす。それはきちんと処方された苦い粉薬で、彼女の苦手とするものだったがその拒絶はできなかった。開封された薬とコップの水を受け取る。うう、と表情を歪ませながらも上を向き、えい、と粉薬を口に空けた。

「――仮病なら飲まなくていい」

ぶは、と喉に詰まって吐き出した。げほげほする。げほげほ。

微妙な表情をした彼に背中をさすられ落ち着くと、水を飲んで口をゆすいだ。

「仮病ではありません」

嘘を吐くと、そうか、悪かったな、と言う。だがもう薬を飲めとは言われなかったので自ら予備の薬（見越したように準備がいい）に手を伸ばしはしなかった。

「すまないが明日は空けられない」

別にすまなくない。申し訳なさそうに言われても、そもそも空けてくれと頼んだ覚えは無い。それに明日の日曜は彼女にも予定があった（駄菓子屋に行く）。それなのにそんなことは無視の前提だった。

彼は彼女をベットに座らせた。どきりとした。風邪だって言ってるのに。違った、お腹が痛いって言ってるのに。仮病は見透かされているのだろうか。

次には何をされるだろうという不安めいた顔でいると、次には驚くべきことを目にした。

――彼が跪き、手を取ってその甲に――

キスをしたのだ。

桂木夕葉の逃走　1

「結婚してくれ」

する、と指輪が嵌めれた。薬指。
……彼女の思考は停止していた。

プロポーズ

それは形だけの。
ここまで律儀だとは。

これもまた、籍を入れるだけが「契約」の範疇ではないらしかった。
彼女は甘く考えていた事を知り、えも言えない恐怖に囚われた。
確かに言った。『誠実な結婚』――だが彼がそう努めても、彼女には悪い人に対してそうできる自信がなかった。

当然「はい」と答えるべきなのだったが、彼女の思考は都合よく停止したままだった。
その間にも彼は立ち上がり、何やら箱を開けるときらきらと繊細な細工が施されたものを取り出す。プラチナとダイヤのティアラ――
それを彼女の頭に戴冠した。

ぷちん、とこめかみが刺激されて、はっと彼女は意識を取り戻した。

それは彼女の髪に差されていた花のピンで、冠とは不釣合いだったので彼は何気なくそれを外したのだった。しかしそれは彼が思うより遥かに大切なピンだった。「他人」が外してはいけなかったのだ。

ずっとずっと、『あの時』から片時も外さず付けている、大切な大切な――

陽ちゃんから告白を受けたときに貰ったピンだった。

「返してください！」

彼女の返事はこれだった。

「返して……返して、ください」

ふるふると震えて手を伸ばした。ピンしか見えていなかった。

陽ちゃんのピン。自分の全て。これがあるから全てに耐えられた。

「返してください、ゆはのピン……ゆはの大事なピンです」

彼女は勢いつけて立ち上がり、からん……とティアラは落ちた。

まだ男の手にあった。

触らないで。

「返して……ください。ゆはの……陽ちゃんの――」

ぱき

え、と思った。
折られて、ぱらんと床に落ちた。
え……
なんで……
ゆはのぴん……
見上げる。責める。黒い男。

「お前の『陽ちゃん』の脚も折って欲しいか？　桂木夕葉」

冷酷な微笑。
これが男の本当の姿、工藤朔太郎の本性だった。
屈んで、ぎゅっとピンの欠片を集めて握る。
走った。
手を伸ばす。
ノブを掴み、ばたんと開け、廊下に出た。
長い廊下を走る。
早く、早く。
逃げなきゃ……
家を出た。
悪魔の家。
早く……遠くに……

降り止まない雨が頬を濡らしていった。

桂木夕葉の逃走　2

ざあざあと雨が降っている。
肩を打ち頭を打ち忽ち体から熱が奪われていった。
霧崎夭輔は薄暗くなり始めた家への帰り道をやや急ぎ足で進んでいた。家に辿り着き、玄関を開けると同時に明るい光と暖かさが彼を包み入れる。次にはぱたぱたと足音が近づいてきた。

「お帰りなさい、夭！」

ぎゅうっ、と抱きつくのは彼の母親だった。
銀色の髪と碧い眼の、フランス人の母親。彼女の実家で彼は育ち、中等部から現在通う修学院高校に入学した。その時母親は未だ二十代の後半だった。後妻ではない。父親と『恋に落ち』（この点彼は疑問を持っている）彼を生んだのが十七の時だったのだ。
この母親は夫似の一人息子が可愛くて仕方がなかった。職業柄父親が頻繁に（現在も）海外赴任していることもあってか、彼に愛情が独占されたのだった。

「夭、濡れています」

彼女は吃驚した。本当に、びしょびしょだった。

「大変です。お母さん、すぐにタオルを持ってきます。それとすぐ

にお風呂に入らなければ。――けれどまだ沸いていない……」

「シャワーでいい」

大変な手落ちをしたように長い睫を伏せる傍ら、漸く抱擁から解放された彼は母親をどけやれやれと廊下に進む。この帰宅毎の抱擁は突き放したりすればもう数日も酷く落ち込むもので、彼にとってはこの数秒だけを我慢する方がずっと楽だった。それにキスを浴びせるのはやめてくれと譲歩はしてもらっているのだ。

「お背中流しますか？」

彼に溜息癖が付いているのはこの母親が原因かもしれない。

――その頃。

桂木夕葉はぽつぽつと道を歩いていた。

雨は土砂降りである。それ以上に彼女の心はずたずただった。

ピンが壊れただけで、と思うかもしれない。

だけど壊れたのは全てだったのだ。

この、今見て見るとウェディングドレスを連想させるような白いレースのドレス。

婚約指輪。ティアラ。プロポーズ。

……言葉――契約事項では分かっていたし守るつもりだったのだが、初めてはっきりと視覚化されて、あの男との婚姻が認識されたのだった。

今日が何の日だったか――

今日は、彼女の誕生日だった。
１６歳。
即ち結婚が可能になる年齢。
なんて自分は甘かったのだろう。
……どこかで、ずっと先のことだと思っていた。
それまでに――

確かに彼女の夢だった。

いつか王子様が現れて彼女の前に跪き、恭しく手を取られて結婚を申し込まれるのが。
だけどそれは王子様であって、決して悪魔からの求婚ではなかった。
それが彼女の夢を準(なぞら)えるように残酷に再現されたのだ。いっそ無理やりなら良かった。あんな、脅迫であるのにあたかも合意のように「はい」を言わせようとするのは卑怯だった。

陽ちゃん……彼女の王子様は、どうして今颯爽と現れないのだろう！彼女がこんなにも苦しんでいるというのに。しかしまだ彼女はどこかで信じていた。いいや今までどこかで信じていた。彼が救い出してくれるものと。どんなお話だって、お姫様は一度捉われの身になってから、必ず王子様が悪者から救い出してくれるのだ。

だけど……もう……

王子様と彼女を繋げる魔法の道具は、砕かれてしまった。

もうずたずただった。

暗い闇。
カンカンと音が聞こえた。
彼女は考えるのを止めた。
死
死んじゃいたい……
王子様のいないお姫様……
ふらふらと、彼女は踏み切りの音に近づいていった。

カンカン
カンカン……

とある父親の拾い物

「頼むから出て行ってくれ」

と彼は母親を風呂場から押しやっていた。

熱いシャワーを体に浴びてふうと漸く息を着かせた時、からと背後に音がして、振り返ればタオルを体に巻いた母親がいそいそと侵入してきたのだ。辛抱強い彼だったが、流石に若干のいらつきを込めて華奢な肩を外へと押し出した。

どうして鍵がついていないんだ。

それが彼の思うことだった。もっと、家のあらゆるところに鍵を設けるべきだった。

しょぼんとした母親だったが、愛する息子に「風呂上りに何か食いたい」と言われて合点し、意気揚々と「何か」を作りに台所に向かった。食事は料理人さんが仕込んでいってくれたのだが、多分追加のデザートのことだろう。早く作り始めなくては。

――それで彼は、風呂につかる時間は確保できただろうな、と湯気を上げて溜まっていくお湯を見た。

彼女得意のチェリーパイをオーブンに入れた時、玄関のほうで二度目のがちゃ、が聞こえた。なんだろうと思いながら、しかし思い当たることもあって急いでエプロンを外しぱたぱたと走っていく。

「旦那様！」

彼女の夫だった。指折り数えて間違いなく、明日に帰ってくる予定だった。驚かせようと息子には内緒にしてある。――ドイツでの赴任が終わり、家族三人揃って生活ができるという夢の日々が始まるのだ。ご馳走もたくさんに用意していた。

しかしそんな些細な疑問など一瞬で吹き飛ぶ程、「嬉しい」に違いなかった。

「お帰りなさいませ、旦那様！」

彼女は飛びついた。ぎゅうう、と抱きしめ抱きしめ返されたかった。

しかし阻むものがあった。何か白いものを抱えていて――

「ただいま、愛しいロゼット」

彼は屈んで愛らしい妻の頬にキスをする。

「それは……？」

微笑をして答えるように包みを差し出した。

「さあ――シンデレラかジュリエットか、お前にお土産だ」

彼女は喜んだ。

小さな女の子――丁度、これくらいの可愛い夭の妹が欲しかったのだ。

＋

夭輔は仰天した。どこで仰天したかというと、風呂場だった。

彼が湯に浸かっていると、からと突然戸が引かれ現れたのは何年振りかの父親だった。そして腕に抱えているのはずぶ濡れの、見間違いで無ければ――気を失った同級生だった。

「邪魔だ」

再会の一言を述べるとそのまま侵入してきた。流石にそれを撃退するのは骨が折れそうだったので、彼は最良の判断としてすぐにその場を脱し母親を呼びに行った。

――どうして鍵が付いていないんだ！

これほど心の叫びが響いたことはない。

同級生は速やかな彼の判断によって母親（『父親』ではなく！）

に洗われ、いつの間にかすやすやとした寝息を立てながら両親に挟まれ居間のソファに座らされていた。

「――で、」

向かいのソファで彼は溜息を吐いて言った。

「どういう状況なんだ？」

彼の両親は顔を見合わせた。そんなことは見て分かるだろう。敬愛すべき一家の父親が数年ぶりに帰宅し、可愛い妻には待ち望んでいた娘を、成長した息子には妹を――小さな女の子を連れて帰ってきたのだ。どうして手放しで喜ばないのだろう。

「ふざけるな」

『まとも』な彼は一蹴した。そして彼が説明をしてやらなければならないようだった。

「こいつの名は桂木夕葉、俺の同級生だ。ちなみに工藤家の縁者で、どういう経緯か知らないが誘拐でも知れたら厄介な事になる」

「――誘拐？」

父親は全く呆れた、かつ憂いのある表情で妻を向いた。

「一体いつから、俺の息子はそんな物騒な物言いをするようになったんだ？」

「ごめんなさい……ロゼは言葉に気を付けたつもりなのですけれど、日本語は少しむつかしくて――夭は悪くないのです」

母親が申し訳なさそうに言うと、父親は軽く首を振る。

「勿論お前が悪い訳がない。育てた人間がどんなに清く美しくたって、何故か捻くれた人間が育つことがあるものだ」

彼は苛々が順調に蓄積されていくのを感じていたが、同級生をこの両親の間に放っていくのは危険だった。さっきこの父親は彼女を湯に入れて「洗おう」としていて、母親もそれに何の不思議も感じていなかったのだ。濡れ冷えて可哀相だからと――それは確かにそうだが。

ふう、と何故吐かれなければいけないのか分からない溜息を吐かれて父は漸く答える。

「まあお前が求めている単調な答えとしてはこうだ。――帰宅途中に踏み切りに差し掛かったところで、雨の中線路の上で倒れている女の子を見つけた。心ある人間の当然の行為として保護をした、と」

「え」

母親の想像とは少し違っていたようだった。

「お空から頂いた子ではないのですか」

「そうでないとは言い切れないな」

「同級生だって言ってんだろ」

真に辛抱強い彼は、苦虫を噛み潰しながらも両親の誤りを指摘した。

リトル・プリンセス

「夕葉」

ん……

彼女は目を覚ました。

目の前に……大っきい――

「天ちゃん……？」

くす、と口元が微笑した。

「おはよう、夕葉」

いつもより低くて深い声。その微笑する口元が額に被さる時――

「ふざけてんじゃねぇよ」

もっと後ろから聞こえたその声にはっとした。この人、天ちゃんじゃない。目も黒い。

「ゆは！」

は、ばっと起き上がった。いきなりだったが、予測済みのように目の前の男の人はひょいと避けた。

「ゆは――死んじゃった？」

「そうなのか？」

「何でだよ」

呆れ声で言うその声。眩しいのも慣れてきて、焦点が合う。

「夭ちゃん……！」

ぼろ、と涙がこぼれた。何故だか分からない。ぼろぼろ零れ落ちた。

「ごめんなさい……」

ぼろぼろ零れて、分からないのにとても謝らなければならなかった。

「ごめんなさい、ゆは、ごめんなさい……」

夭輔は戸惑った。突然涙を溢して謝り出した女子にどう対応したらいいか分からなかった。

「――反省しているなら、」

彼の父親は小さな頭にぽんと手を置いた。茶色の瞳を覗いて言う。

「もう叱る必要はないな？」

彼女は泣いた。

大きな胸にしがみ付いて、わんわんと声を上げて泣いた。

彼はまた少し父親が嫌いになった。

＋

「たくさん食え」

あんと開けた口にチェリーパイを入れられて、夕葉はもぐもぐと口を動かした。

――すっかり、懐いていた。

「旦那様、ロゼも」

くいくい引っ張ってあんと開けた口にもまた入れてやる。

父親の隣に母親、向かいに同級生、夭輔は彼女の隣の席で黙って食事をしていた。尤も普段の食事でも彼は寡黙気味だったが。

いつもの夕飯時、一方は構ってもらえず一方は構われたくもなく、いずれにしろ寂しさを覚えていたのでその夜は二人共が目いっぱいに甘えていた。過剰な甘えぶりには鬱陶しさを覚えていた夭輔は矛先が変わってほっとしている――筈だ。

彼は食事を終えさっさと立ち上がった――ところでふと父親が気がついた。

「ロゼット、手伝いの姿を見ないが？」
「あ、お手伝いさんは夕迄にしてもらいました。夭と二人になりたいので……」
「ほお」

――嫌な予感がした。何か言葉が足らないんだ、母親は。しかも何故頬を染める？

「夭輔、母親の手伝いはしているか？」
「……」
「旦那様、夭はお部活で帰ってくるのが遅いので」
「今は帰っているだろう？」

――彼は無言で、済んだ食器を片付け始めた。

「あ、夭。大丈夫です、お母さんがしますので」

立ち上がりかけるのを父親が引き止める。

「ロゼット、かわいい子には旅させよという言葉がある」
「可愛いお子には足袋を……はい、旦那様」

よく分かってないのに納得したようにこくんと頷いて、今持って来ます、と言うのを男は後でいい、と微笑し兎の小首を掴むような感じで彼女を止めていた。

食事が終わると、夕葉は人の体温に気持ちよくなってすやすやと

眠りに着いた。

「旦那様、ロゼも」

抱っこされているのを代わってほしくてくいくいと引っ張ると、微笑する男に頭を撫でられる。

「ロゼ、膝は娘に譲ってやったらどうだ？」

しゅんとするが、男が髪を掻きやって耳に何事か囁くとぽっと頬を染めてこくんと素直に頷く。後は大人しくしていた。

「――そろそろ桂木を送ってやった方がいいんじゃねぇか」

ちらと時計を見て、夭輔はとうとう口を挟んだ。彼は彼で幾らか義務を感じてこの同級生を放って自分の部屋に上がってしまうのを控えていた。本来は父母がいちゃつくような場に居るつもりなど毛頭なかったのだが。彼としてはそろそろ役目も終えていい頃合いだった。

門限が六時だとか言っていた――……もう八時を少し回っている。

しかし。

「馬鹿だな、お前は」

呆れた様に言われてむっとした。

「少し懲りた方がいいだろう――まあ、後小一時間程はな？」

懲りた方がいいとはあの工藤朔太郎に言っているのか。一体何を知った被りなのか知らないが。

「――何か知ってんのか」
「さあ？」
相変わらず気を逆撫でる、その無駄にはぐらかした答え方。知っていようといなかろうとこの答え方だろう。まるで、もし知っていてもお前が知る必要はない、と言わんばかりの。
「警察に動かれたらあんたは困るんじゃないのか？」
くす、と父は笑った。
「なんだ、お前は実は俺が政府で動く傍ら犯罪シンジケートにも通じている、とでも思っているのか？本当にお前は想像力豊かで羨ましいな」
それから続けて、
「――直観的に言うと、何か訳ありだな。お前のこの同級生は」
と言う。
「……桂木は、」
天輔はそれから黙った。昼休み、何故それを自分に言ったかは知らないが――
「『工藤朔太郎』の婚約者だとか？」
「――何で」
父親はくっくと可笑しそうに笑う。

「本当にお前は読みやすいな。良かったな、本家に生まれなくて。お前には絶対向かない職業だ」

これは遺憾だった。彼は常に仏頂面で、むしろ表情が読み難いと言われていた。というかこういうことが嫌で自然とそうなったのかもしれない。読心術から逃れる為に。

「お前のその表情！　家出、故朔太郎氏と工藤家の事情。――どうやら遺産がらみで婚約はしたが恋人未満ってところだな。中々忘れられない人がいるらしい」

男は何かを包んだハンカチを開き、自分だけ見るとくすりと笑った。

「――そこにお前が加わるとなると、事は少々複雑微妙に展開されるな」

「何で俺が加わるんだよ」

仏頂面に言うと、

「失礼。『未だ』だったか」

彼はこの、すべての筋書きを知っている――如き物言いの父親を睨んだ。突然現れてこうだ。

「そう睨むな？今回は存分に端役を愉しませて貰おう」

愉快で堪らなさそうに笑ってから、隣で大人しくしている妻に、なあロゼ？と問いかける。

「はい、旦那様」
と話も分かっていないだろうに夫に合わせて嬉しそうに答えた。
それから軽々立ち上がると腕に抱いた少女を息子に差し出す。
「小さなお姫様は頼んだぜ」
は？――と言い掛けたが、なんと落とすような素振りに反射的に立ち上がり受け止める。が、人の体――初めて抱えたそれは存外バランスが必要で思わずぐらりとよろける。
「ふむ」
と一度軽く頷いてから、体幹が崩れているな、と呟いて。
「サッカーでも始めたか」と何か可笑しげな顔をした。
む、と思い睨んで返す。だったらなんだ。
「工藤君を呼んだら教えてくれ」
軽やかな微笑で事も無げに言い放つ男に向かって、あんたはどこに行くんだよ――と返す間もなく、
「仕方ないだろう？ロゼがもう待てないって言うんだから」
と妻の手を引いて行ってしまった。母親がその腕にぎゅっとしがみ付くのを見て、彼も諦めざるを得なかった。
父母が行ってしまうと部屋は静まりかえり、くうくういう音に気がついた。
腕に感じるほの柔らかさに気まずくなり、目を背けながらもそれをそろそろとソファに下ろした。

重みで少しソファは沈む。
夕葉はそれでもくうくうと寝息を立てている。
全く、神経が細いんだか太いんだか……。
奇妙な女子だ。

「桂木……」

呟いてみてから、彼も背もたれに身を預けた。

霧崎夭輔の考察

ベットに男が腰を掛け、女は乗り上がってその背に包帯を巻いていた。
背は一面に赤く擦れ、斑に皮が剥がれて血が薄く滲んでいた。
「旦那様、お痛いですか、旦那様……」
「風呂に入ったら染みるかな――まあ、その程度だ」
心配そうな背の声に男は笑って答える。
「かんかんに飛び出してはいけません。とても危ないのです……」
「そうだな、飛び出したら危ないな。――きっと教わらなかったのだろう」
憂う声音に女は遠慮がちに口を開いた
「旦那様……ゆはちゃん――ロゼがお風呂に入れた時、」
「ああ、ロゼ、お前が心痛める顔を見たくなかった」
男は少し首を振る。
「一体何が可笑しいだろう。人に怯え、焦がれることが。俺達は――」
月を閉ざす曇天を覗き男は問う。女は答えた。

「お父さんとお母さんです、旦那様」
「そうに違いない、愛しいロゼット――俺の真実」

柔らかな微笑をして包帯を巻き終えた女の手を取る。そうして自然に男と女は唇を重ねた。

「ん……」

ころんと寝返りを打つ、のをちらと見てそれからまた時計に目をやった。もうそろそろ一時間になる――。
小さな同級生は、ここがすっかり安全な場所だと信じてすやすやと寝息を立てている。少しだけ体を丸め、それで彼の座るソファに収まっていた。

「ようちゃん……」

目覚めたかと思ったが、幸せそうな笑みを見て自分ではない方だろうと目を逸らす。
それにしても……
『婚約者だ』

――何故、桂木が。

どうも合点がいかない。桂木夕葉が資産を目当てに結婚を望むとは思えないし、工藤朔太郎が幾多の候補の中から彼女を選ぶのも分からない。あの合理的な男にとって、親類との婚姻に何の益があるのだろう。どの界にも桂木という名は聞かないというのに。そして「日々谷陽介」はどこに行ったのか。

日々谷陽介の失踪と桂木夕葉の婚約――

関係があるのかもしれない。

……例えば、故朔太郎氏は孫娘の桂木夕葉を非常に可愛いがっていた。しかし争いを避ける為に遺産相続はさせてやれなかった。そこで工藤財閥の跡継ぎになるであろう長男の息子との結婚を思いつき、それを遺書に盛り込んだ。それは桂木夕葉にとっては的が外れた『幸せ』の遺し方だったが、これに巻き込まれた孫の朔太郎は遺産を相続する為に何か横暴な手段を講じて彼女に結婚を迫り、約束させた。しかし彼女の幼馴染であった日比谷陽介は実は彼女に想いを寄せていた――

『日比谷陽介がＵＦＣに行くでもなく強豪校の推薦も蹴って地元の公立高校に進学したのは、「国立に連れて行く」と約束した南ちゃん的な存在があったからだ』

――と力説された早川説を片隅に置いて夭輔は推察する。

そして桂木夕葉の婚約を知った日比谷陽介は高校サッカー界から姿を消した……

――辻褄が合わなくもない。しかし横暴な手段と言って――
すやすやと無防備に寝ている……ちょっと開いた、小さな桃色の唇……

「――はぁっ」

腹の底から吐き出すように溜息をついた。一体何を、こんな――

「三文ドラマの脚本でも考えているのか？」

びくっとして振り向いた。戸のところに父親が立っていてくすくすと笑っていた。
か、と一気に顔に血が昇る。断じて声に出していない。だから、何で――……いや、熱くなっては益々面白がらせるだけだ。

「……早かったな」

ぼそ、と言った。実際、もう帰って来ないで自分が一人工藤朔太郎と向き合うのを愉しむつもりかと思っていた。

「まあ、ロゼが頑張ってくれたからな」
無視。
「偏見だな……」
無駄に物憂げな溜息。
「偏った思考からは真実は見出せないぜ？」
無駄に気障な台詞。どこの探偵だ。

「――ところで連絡はしたか？」

黙ったままでいると、父親はやはりどことない微笑のまま黒電話の方へ行って指を掛けた。意外に自分で動くつもりもあるらしい。
ジィー、ジィーと回す。逃げ出してきた小動物はすっかりと安心しきって眠っている。

「――桂木に訊かなくて良いのか？」

そう言うと一瞬手を止め、
「思いやりのある子だ」
と微笑んでからしかし構わず回し切り、むっとするだけに終わった。
しかし電話が繋がったかと思うと二言三言話しただけでちんと切ってしまった。

「夭輔、面白いぜ」

そして振り返った時は、どうやら確かに何か面白いと思っているような表情だった。泰然とした笑みではなく、どこか子供が新しい摂理を発見した時のような。
「何が」
余程の事だろうと思いつつ投げやりに訊く。

「工藤朔太郎が電話に出ない」

何が……面白いのか理解不能だ。挙句にくすくす笑い出す。
「そうか。……いいやあるいは――」
意味ありげな台詞を吐き、そして勝手に一つ頷き自己完結したようだった。

「……何なんだよ」

巻き込んだ上での蚊帳の外、父親の帰宅から何かと鬱憤は溜まっていた。しかし彼の父は不機嫌な様子もちっとも気にせず気さくに答える。

「天輔、工藤君は連絡をしてやらなくともいずれここに来るだろう。――お前の方が一枚上手だったな？」

それじゃあお茶でもして待ってよう、カモミールなんてどうだ？、と訊いてきた所をみるとどうやら自分も一緒に待っているべきらしい。父親と二人でお茶をするなんて気持ち悪いことこの上ない。

せめてこのクラスメイトをもう起こしてしまおう――

はじめてのお泊り

「ん……」

目を擦りながら夕葉はぽやんとしたが、またうとうとと重そうに瞼を落とした。

「夕葉、迎えが来るぜ」

――しかしその言葉にばちんとシャボン玉が割れたように目を覚ます。

裏切られたような、そんな表情で父親を見ると（いい気味だ）

……ぎゅっと自分の腕にしがみついてきた。

「天ちゃん……」

助けて、というような。だが自分もそれが妥当だろうと思っていた。

「しかし心配はするな。夕葉が家（うち）にに泊まっていくと聞けば工藤君も安心して帰れるだろう」

「え」

ぽ、と頬を染めた。よく分からない。だがすぐにしゅんとする。

「でも……」

「大丈夫だ、工藤君とはちょっとした知り合いだからな。俺に任せてくれ」

片目を瞑って見せると、ぽやっとしてこくんと頷いた。なんなんだ？　いい年して恰好つけやがって、この中年が。
桂木は手招かれるままにもう父親の膝に乗っていて、なんだか猫のようにごろごろしていた。
しかし俺は先ほどの台詞には疑問を抱く。

『霧崎家の人間だな？』

桂木を送り届けた際の工藤朔太郎のあの言葉――には好意的なものは一切感じられなかった。むしろ嫌悪と警戒だ。「ちょっとした知り合い」が何なのかは分からないが、確実に相手側には悪い印象しか与えていないだろう。

「夭ちゃんのお父さん……とても格好いい」

だぼだぼのスウェットを着て、桂木は頬をりんご色に染めた。
その寝巻きというのは自分が貸すはめになったものだ。
――何故こういう状態に陥ったかと言うと、『ロゼはもう寝ている』からだ。人のものを勝手に使ってはいけないと。いいや違う、面白がっているだけだ。桂木の手前、俺が睨み付ける事もできないのを。それにしても居づらい。ここは自分の部屋だというのに。

「桂木……」

そろそろ出て行けよ、と言いかけて口を噤んだ。彼には扱いが分からなかった。日下や今村や、ああいう女とは違う。母親はすぐにめそめそするが、立ち直りも案外早い。三日も立てば忘れてまたに

こにこと能天気にかつ過剰に構ってくる。
だが桂木夕葉は違う。人から不当な扱いを受けても黙ってそれに耐え、耐え続け、そして突然ぱりんとガラスのように壊れてしまいそうだった。自分の分で一筋も「ヒビ」は入れたくなかった。

彼は暫く困っていたが、夕葉がちらとベットに目を向けた時にはその居づらさは頂点に達していた。しかしまだ甘かった。それからなんと寝巻きをずり落としながらとことことそこへ向かっていき、ベットのところでくるりと振り向く。

「夭ちゃんは、手前と奥とどっちがいい？」
「……」

変な汗が背を流れた。――あの親父……！

「桂木、お前の寝る部屋は別に用意してある」

よく言えた。これなら傷つきはしないだろう。実際使いもしない客間が毎日整えられてある。

「え」

なんだか眉を下げた。これでも言い方を間違えたか？

「夭ちゃん……もしかして……」

目が潤んできている。慌てて言葉を足した。

「嫌だとかそういうことじゃねぇ、俺は――寝相が悪い」

なんなんだ、これは。
こんな時に――初めてあの同級生達の存在を欲した。あいつらなら上手く――
『桂木さん、朝起きたら黴(かび)が移っていてもいいの？』
『ゆ、ゆはっち……それではわわ私と一緒のお布団に入るのはどうでしょうか。決して変な意味ではなく』
『桂木、そういうのはもうちょっと後にしような。ほら、お前の布団に連れてってやるから』
……上手くやってくれるに違いない。
「ゆは、」
ぽすんとベットに腰掛け少し顔を俯いた。
「――変？」
答えに窮した。その通りだ。
「どうしたらいい？……ゆは、お友達の家にお泊りをするのは初めてで……」
なんだか分かった。そうだ、並外れて人と感性が外れているという訳ではないのだろう。
彼も早川宅に泊まった事はあった。確か練習の後、「サッカーを志すなら絶対に読んで置かなければならない漫画がある」とか言われて少しのつもりで立ち寄ったところ、その家族に是非夕飯をと言われ、そしてそのまま泊まっていけと半ば強引に――
確かにパジャマを貸して貰い同じ部屋で寝て、それが自然だった。

――いや。

彼は冷静だった。

うっかり「有り」に判定負けしそうになったが、そんな筈はない。そういうのは同姓の場合だ。こういう場合男の被害は大したこともないが、女の方の風評には著しく関わるだろう。待てよ……そもそも桂木は「女」か？

――いや流石に今のは失礼だ。

彼がこのような思考を巡らせ、その間彼女は癖で頭を空っぽにしていた時――

『　』

『　』

階下で人の話し声が聞こえた。

押し入れの彼女

夜の訪問者！

またぱちんと夕葉は目覚め、途端にびくつき出して目をうろうろさせる。

そして何を思ったかベット下の隙間に潜り込もうとした――

「桂木！」

彼は止める。掴んだ襟首がぐいんと伸びて白い背筋が覗く。はっとして離す。

彼女は無事にもそもそと潜り込み、そしてけほけほと咳をした。

――埃がたまっていたのだ。

自分で掃除するからと人を部屋に入れないようにしていたのだが、そう頻繁な掃除は怠っていた。それにベット下には――兎に角彼は彼女の健康の為に引きずり出さなければならなかった。

「桂木、もっといい隠れ場所がある」

流石に居心地が悪かったのか少し白っぽくなった彼女が素直に這い出て来る。彼も大分彼女の扱いに慣れてきたのかもしれない。

そして髪に絡む埃を少々摘まんでやってから、クローゼットの空いてる段に押し上げた。　実際、工藤朔太郎が絶対にこの部屋に来ないという保証は無かったし、自分としても理事長の婚約者が自分の寝巻きを着て自分の部屋にいるという事実を目撃されるのは避けたかった。下手をすると冗談抜きで退学になりかねない。

――彼らがあたふたしている時、階下ではまさしく工藤朔太郎が霧崎家を訪れていた。

「やあ、久しぶりだな？」

夜の訪問者は思わぬ人物の出迎えに畏まるが、男はくすりと笑って招き入れる。

「用件は分かっている――さあ、上がってくれ。朔次郎君？」

応接間に一人男がいる。

瞼を閉じてじっとしていたが、そうすれば余計に時間は長く感じられた。と、扉が開く音がして目を開く。若干の緊張をして振り向いた――が入ってきたのは盆を持った男一人で、彼の婚約者は連れていなかった。

「紅茶はダージリンで良かったかな、朔次郎君？」

「お構いなく。それと朔太郎です、霧崎さん」

「失礼。年は取りたくないものだな」

悠長に笑って、男は銀盆に載せたティーカップに紅茶を注ぐ。そ

の片方を客の前に置くと、自分はカップの取っ手を軽く摘み上げそのまま立ち飲んだ。それが自然の飲み方であるような都会的なシルエット。
そうして飲み干したところでカップを置き、寛いだ雰囲気で腰を下ろす。

「さて、何の用だったかな、朔次郎君」
「朔太郎です、霧崎さん」
辛抱強く答えるが最早わざとにしか思えない。
「それにしてもお祖父様が逝去されたばかりで君も辛いだろう」
だからと言って人の名を恣意的に一字違えるのは普通の感覚なのか？
「お心遣い有難うございます、霧崎さん。御教示など頂きたいところですが夜更けに長居させて頂く訳にも参りませんので――」
「いいやそれは気にしないでくれ。どうやら時差呆けで夜は暇をしそうだ。そうか、君がそう言うなら朔次――失礼、紛らわしいな。工藤君、是非今夜はうちで飲み交わそうぜ」
彼は丁重にお断りした。そしていとこを一晩預かって貰う事への礼ともう自分は帰る旨を告げる。しかし男は何故だか驚いてみせた。
「君は俺に訊きたい事があって来たんじゃないのか？」
――はあ？内心思っていると、極真面目な顔をして言う。

「世界一可愛い妻を落とした俺に」

「……」

こういうふざけた人間は苦手だ。

「工藤君、感覚でものを把握する型の女に理詰めや利益で迫っても心は動かないぜ。特に君のいとこは対人感覚が鋭敏で極端だ。そういう場合第一印象が大事なんだが――まあ君はもう手遅れだろうが、未だ諦める事はない。真心を込めればきっと察知してくれるだろう」

何か始まった……が、婚約者だということは息子から聞き及んでいたとしても、何故いとこの性格や自分への第一印象までもが分かるのだろう。自分とは何年も昔に一度会ったきりで、従妹と会ったのは今日が初めての筈だ。

「要点は単純だ」

男は微笑して、ガラスボードからグラスと琥珀色のウィスキー瓶を取り出した。　男は微笑して、ガラスボードからグラスと琥珀色のウィスキー瓶を取り出した。

「体に教えてやることさ」

「何も特別なことでもない、君のライバルだってそうしたことだ。――体は正直なものだ、現実に陽だまりがあれば記憶の陽だまりに縋って凍える必要も無くなる」

……唯問題が、と男は眼を向ける。全て見透かしていくような、黒の瞳と微笑。

「君が君を失ったということだな」

「……」

「新月――巡り、有って無いもの……面白いな、『工藤朔太郎』君。まあ今夜は飲もうぜ、凡ての廻り合わせの数奇を祝って」

片目を瞑り、男はロックグラスを差し出してきた。

――さて上階に戻る。

時間はもう0時を打とうとしていた。

から、

突然クローゼットが内側から開く。爪を切っていた彼は思わずぱちんと深爪をしてしまった。――あれからかたりとも音がしなかったので、押入れに押し込んだ同級生の存在はすっかり彼の意識の外となっていたのだ。

桂木夕葉がひょこんと姿を顕す。

「夭ちゃん……」

何か言葉にして貰わないと分からないんだが、何か訴えるような何か言葉を望んでいるような心細気な顔。ちらちらと時計を見ている。

「何だ？」

多分父親ならこういう小さなサインで何事か分かってしまうのだろうが、彼にとって桂木夕葉の感情表現は母親よりずっと曖昧で分かりにくかった。

チッ、チッ、チッと時計が告げる。何故か見詰め合って、――そうしてゆっくりと、少し悲しそうに桂木夕葉が口を開く……

「ゆは――」

三秒前。彼ははっとした。

「誕生日おめでとう、桂木」

0時になった。

しん、とした。彼は思った。何を言っているんだ、自分は。直感？――何故だか知らないが時刻に迫られている気がして、そんなものに頼って思わず言ってしまった。

だが。

「ありがとう、天ちゃん」

途端に彼女は白い小粒の歯を見せて笑った。――心から、嬉しさ

が込み上げてたまらないような。
真夜中、自分の部屋のクローゼットの段に少女が腰掛けて嬉しそうに足をぷらぷらさせて笑っている。なんだか奇妙な光景だった。夢だとか、クローゼットの幽霊だとか、そんなものを見ている感じの。
まあ兎に角、お互いに無事間に合ったようだった。

「……もう寝ようぜ」
「うん」

そうして彼と彼女は自分の寝床に戻っていった。

お誕生会

「あの人、未成年だぜ」

うん？と父親が気だるい様相でパンにバターを塗っている。

工藤朔太郎は早朝に帰ったようだ。夭輔が六時に階下に下りた時には既に彼の姿はなく、テーブルには二人分のグラスと溶けた氷入れと幾つか空の瓶が置いてあった。

――何してんだ、この親父。

シャツのままソファに眠る父を呆れた目で見ると、彼は声も掛けずにそのままランニングに出た。

それから一時間後、帰って来ると母親が朝食の準備をして、桂木夕葉がそれを手伝って台所にいた。そうしてすっかり朝食の準備が整うと、母親はうきうきとして言う。

「旦那様を起こしてきます」

それから十分も経った頃、戻る気配もないのでパンに手を伸ばすと桂木に止められた。

なんとも遠慮がちに、頼み込むような目で止めるので仕方なく空腹のまま新聞を読んで待っていた。（桂木は戦隊もののテレビ番組を熱心に見ていた）

そして初めに呼びに行ってから三十分後、漸く一家の朝食が始まった。

「へぇ……」

適当に答えた父親はバターを塗ったパンを夕葉に渡してやって、彼女の方はそれを喜んではむと齧った。母親はにこにことそれを見て、交渉時かと思ったのか話を切り出した。

「ゆうはちゃん、夭の妹になりませんか？」

「……そいつ、一応俺より早く生まれてるぜ」

まともな議論は通じそうにないので取り敢えず分かりやすい点を指摘する。

しかし何故だか父親がこれに答えた。答えたのか？

「そういうことで、今日は夕葉の誕生会をしよう」

何がそういうことなんだ？つーか何で知ってんだよ。

「ロゼット、丁度うちにはご馳走の準備があるだろう？」

「はい、旦那様。旦那様が帰ってくるのでたくさん美味しいものを準備しています」

母親が得意げに答える。

「夭輔、早速招待状を」

「――はあ？」

「何だ、お前友達はいないのか？」

「……――」

はあ、と溜息を吐いた。桂木の目がきらきらしていたので仕方がない。

＋

『夕葉の誕生会は四時がいいな……俺は寝る』

父親は朝食も余り進まずに（彼の見るところ、自分の分はほとんど夕葉にやっていた）席を立つと、ふあ、と欠伸を噛み殺してそう言った。

『旦那様、ロゼも。旦那様がお気持ちよく眠れるようにします』

と付いて来る妻に微笑んでやり、

『ありがとう、ロゼ。それなら後の指示は任せていいか』

『はい、旦那様。ロゼ頑張ります』

任せられて嬉しそうな妻の頭を撫でてやってから、一人ダイニングを出て行った。

そして三時になる前にはすっかり目覚めた様子の父親がいた。シャワーを上がったばかりの父親を見つけて夕葉は飛びつこうとし、しかし一歩手前で躊躇っていた。父親はネクタイはしないが黒のジャケットを羽織った少しフォーマルな格好をしていた。

「どうした、夕葉？」

遠慮はしなくていいぜ、と手を差し伸べるが夕葉は困った様子で足を踏んでいた。

「黒……」

「黒が怖いか？」

こくんと頷く。悪い人の色。でも天ちゃんのお父さん。

悩んでいるとぐい、と引っ張られてその腕の中に収まった。抗う間もなく目の前が塞がれたのを吃驚していると、頭から低くて心地よい声がする。

「お前と同じだ」

額がぴとと胸にくっついて、耳にはとくんとくんと暖かい音が聞こえた。とくんとくん。

眠りに誘う音。その上頭を優しく撫でられて、自然と瞼が落ちて立ちながら眠ってしまえそうだった。

「夕葉……お前が慣れるまでこうしていてやる」

彼女はずっとそうしていたかった――が、ぴんぽんとチャイムが聞こえた。

チャイムが鳴った時天輔は居間にいた。母親や手伝いの人が手一杯なのを見て応対に出たところ、廊下で同級生と父親が抱き合っているのを見たが何も言わずに通り過ぎて玄関に向かった。

「今日（こんにち）は、霧崎君」

初めに来たのは日下葉那だった。
「少し早いと思うんだけど、上がってもいいかしら」
ちらと後ろを見るともう謎の抱擁は終わっていたので、黙って脇にどけた。日下葉那は靴を揃えると玄関を上がってそのまま廊下を進む。

「真次さん」

にっこりと微笑んで男に対した。

「お久しぶりです。今日帰って来られると聞いていたので御挨拶には向かおうと思っていたのですけれど、ご家族での晩餐に招いて頂けてとても光栄です」

肘に下げていた紙袋から白い小箱を取り出して差し出す。

「これ、クッキーを焼いてみたので貰って頂けませんか。お口に合うか不安ですけれど」

男はありがとう、と軽く笑って受け取ってから、

「もしそうだったら勿論君を招くと思うが、」

それからちらと隣の小さな頭に目をやって優しい微笑をする。

「今日の催しは夕葉の誕生会なんだ。夭輔から聞いていないか？」
「あら、」

初めて横に夕葉がいるのに気づいたようにちらと見て、困った顔をした。

「そうだったんですか。ごめんなさい、桂木さん。霧崎君からはそうと聞いていなかったのでてっきり……」

確かに彼は言ってなかった。というより、電話を掛けた時には彼女はお茶の稽古とかで居合わせず、もうすぐに終わるだろうから掛け直させる、とのことだった。しかし午後になっても電話は掛かって来なかったので、まあいいか、という感覚でいたのだった。

元々彼としては彼女を積極的に呼ぼうという気はなく（はっきり言ってしまえば彼自身としては極力顔を合わせたくなかった）桂木ともそう打ち解けている様子でもなかったのでこういう感覚でいたのだが、確かに責任は彼にありそうだった。それで彼は少し誤解を受ける言い方にも黙っていた。恐らくそういう思考まで読み越しているのだろうと何となく分かってはいたが。

そもそも何故「そう打ち解けている訳でもなさそうな」日下葉那を呼んだのかというと、

「桂木夕葉の友達」が誰なのか彼にはぴんと来なかったのだ。

教室での記憶を再生する――

『桂木、好きなサッカー選手とかっていんの？――いや、プロの中で』……早川達也。

『ゆはりんゆはりん、好きなタイプってどんな？――え、誰それ有名人？』……今村茜。

『桂木さん、幼馴染なんてものに幻想を見ない方がいいと思うわ』……日下葉那？

しかしおよそ二ヶ月の記憶を遡ってみても、桂木夕葉が自分とこの三人の他にまともに口を聞いているのを見たことがなかった。

従って『友達を呼んで誕生会』とすると妥当な人数から言って選抜の余地は無かったのだ。

兎にも角も招いた者たち招かれた者たちは集まり、霧崎邸にて一日遅れの夕葉の誕生会が開かれたのだった。

明日の空

夜が空を支配し始めるともうお開きということで、霧崎家の父親が各人を車で送っていくことになった。玄関で夕葉と夭輔、そして母親が見送る。

「ゆゆりん、じゃ！また明日～」
「桂木は帰んねーの？」
「お邪魔しました。さようなら、桂木さん」

夕葉は嬉しそうに手を振って招待客を見送った。
こうして霧崎邸から人が去っていき、後片付けも大方終わると夕葉は夭輔と一緒に二階に上がり（当然のようについていった）彼の部屋でくつろいだ。ぺたんと床に座って自分の前にプレゼントを並べ、にこにこしている。
とても嬉しそうで、昨日びしょ濡れで気絶したままこの家に連れて来られたとは思えなかった。

……今日も泊まんのか？

本人はそれ以外の可能性を考えていないようだった。
なんだか本当に妹ができたらこういう感じだろうかと思ったが、それは微妙な気分だった。夕葉は餌を貰う小鳥のように父親にすり付き、それに触発されてか母親までもが競うように甘え出す。五歳の幼児が一度に二人増えたような気疲れがあった。といっても彼が直接の被害を受けている訳ではなく、遠目からよく疲れないなと微笑を崩さない父親を眺めるだけだったが。

「夕葉、」

その父親が帰ってきてドアのところで呼び掛けた。喜んで駆け寄っていく。

「お前を送っていく」

彼は思わず彼女を見たが、まあ、驚いていた。

笑い出しそうになってしまうのだが、本当に口をあんぐり開けて驚いている。

それから二三秒経つと、ふるふると首を振り出す。ほとんど泣き出しそうだった。

「俺だってお前を返したくはない」

真面目な顔をしてこういうことを言っている。そうして小さな雛の前にしゃがみ込み、子供に言い聞かせるように下から顔を覗いて言った。

「だが俺が帰さなかったらお前が工藤君の信頼を裏切る事になる」

可哀想に、余りよく分からない、困った悲しい顔をしていた。

「――都合よく常識的だな。娘だとか言っておいて」

吐き捨てる様に言うと、父親は真面目な顔のまま「あるいは、」と言って自分の方に目を向けた。

「名実ともに娘にも成り得る――」

「ふざけんな」

父親をきつく睨んだ。言わんとすることは分かる。が、冗談にしては酷だった。桂木夕葉には婚約者がいる――ことでは、ない。彼女には明らかに、想う人があった。それは日々谷陽介であって自分ではない。不思議な程この内気な少女に懐かれた彼だったが、その理由は正しく理解しているつもりだった。

名前被りだ。

単純過ぎる理由だが、この少女は人の好き嫌いが極めて単純らしかった。日々谷陽介にどう関係しているか――それが最重要項なのだ。

だから彼は微塵も思い上がる気は無かったし、勝手にその姿を見出そうとする彼女を厭う気にもなれなかった。何か事情は分からないが、日々谷陽介はおらず、父母兄弟の存在も感じさせず、慣れもせずに工藤家に居候しているのだ。

始業式の当日を思い出す――隣の席になった女子は陰鬱で、じっと耐えるように俯いていた。おどおどして、むしろ決して話し掛けないで欲しいと言っているようだった。

それが突然に自分に対してだけ無邪気な笑顔を見せたのには驚いた。

――多分、辛い状況に置かれているのだろう。きっかけさえあれば誰かを拠り所にせずにはいられない程に。

……だからこそ、中途半端に突き放すことが許せなかった。

母親は本気だった。

だが父親は現実的には無理だと知りながら、母親と同様それが分かっていない彼女に儚い夢を見させたのだった。そうして最後に打ち砕く。この瞬間が嫌で、だから彼は父親が彼女を膝に乗せて微笑

する様に吐き気がする程苛々していたのだった。

「なんて優しい子なんだろう」

父親は感嘆した風の溜息を吐いてみせる。

「流石ロゼットが育てただけのことはある。あいつが俺に付いて来なかった時は本当に落ち込んだものだが、結局あいつは正しい方向へ導いてくれる。きっとあいつは天使なんだろう」

そんな事を一人で言った後、夕葉、と呼んで向き直った。彼女はちょっと羨ましそうに唇を尖らせていた。

「お前もきっと誰かの天使になる」

微笑んでから、小さな手に何か握らせた。彼女はゆっくりとそれを開く。そして吃驚していた。

「何で……ゆはのぴん……」

壊れてしまった彼女のピン。消えてしまった大切なピン。

それが、すっかり元通りになって彼女の手のひらの上に小さな花を咲かせていた。

「間に合って良かった」

笑ってから、しかし一つ部分をなぞった。ようく目を凝らせば細い線があった。

「魔法じゃない。決して時間は逆には戻らない――だがお前がずっと握りしめていたからここにある。夕葉、いつだって鍵は自分が持っている事を忘れないでくれ」

それから彼女を軽々と抱き上げる。

「おいで夕葉。俺からの誕生日プレゼントを未だ渡していなかったな？」

頭を撫でて、星明りだけの廊下へと消えていった。

彼は直感的に彼女はもう家へ帰るだろうと悟ったので、扉を閉め、未だ少し早いが部屋の明かりを消した。そうして窓明かりだけでぼんやりと、そう言えば昨日は雨だったと思い出した。長かったような短かったような。

明日の天気は何だろう、と彼は思った。

明日の空（後書き）

一章、了。

月夜の奏曲

銀色のハーモニカに唇を当てて、息を吹き込む。
心が命を持ったように、音色になる。
奏で方なんて何も分からないけれど、涙を流すよりずっと気持ちが安らいだ。

そうして耳を澄ますと、綺麗な音色が木霊してくる気がするのだ。
気がするのではない。微かだけれど、それは彼女のでたらめなハーモニカではなかった。とても整ったピアノの音――オルゴールのような音楽だった。

彼女はそれを余り不思議には思っていなかった。音の妖精がいて、姿は現さないけれど彼女を慰めてくれているのだと思っていた。
だから毎晩ハーモニカを吹き、耳を澄ませ、微かな音楽に包まれて眠りに着いた。
だけど彼女だって、妖精に会ってみたくなった。
もしかしたら姿を見せてくれるかもしれないと思った。
鍵を開くかどうかは自分なのだから。

そういう訳で、彼女は花のピンを差しお守りのハーモニカを握り締めて、寝巻きのまま自分の部屋の扉を開いた。鍵は掛けないでほしいときちんと言ったのだ。夜中にトイレに行きたくなるから、と付け加えて。
音楽が聴こえて来る方向は分かっていた。いつも同じ側に耳を澄ます……

とんとん、とんとん、

て、て、て、て

歩いた事のない廊下をずっと歩いて、彼女は見当を付けた辺りまで来た。
うろうろした。
戸がいっぱいある。
けれどどれも灯りはついていない。
どうしよう？
でもハーモニカを吹いてあの人が現れたり取り上げられてしまったら嫌だ。

――ちょっとだけ。

唇をちょっと開いてぷ、と吹く。
そうしたらちょっと行ったところでぷ、と同じ音が返ってきた。
同じ音階の、ピアノの音。てててと歩いていって、ノブに手を掛けた。回した。かちりと開いた。

大きな窓と、弧を描く月と、黒いピアノと、――黒い、人。

「やっと来たな、夕葉」

薄く笑うその人。息を飲んで固まってしまった。
「――朔太郎様……」

「本当に忘れたんだな」

やれやれと軽く首を振ると、ピアノの椅子にすとんと腰を下ろした。鍵盤に指を掛ける。

それからオルゴールの音色が流れた。

鍵盤の重さ、軽さ、音の振動が骨を伝い音色が鼓膜から脳を揺さぶる……

この音……この音は、――『知っている』――

「太郎ちゃん……！」

刹那口元は微笑して黒曜石のように滑らかな瞳が向いた。そうして眼を瞑って弾き続ける。

太郎ちゃん……なんでそう呼んだのだろう？

この人は誰だろう？いいや知っている。小さい頃の夢に出てきた――

余韻を残して、ピアノの音は止んだ。

「太郎ちゃん」

駆け寄った。見上げる。あの人に見える。だけど違う。違う人だ。

「違うな、俺達の夕葉」

彼は微笑して言った。

「俺は『工藤朔太郎』の双子の弟――音楽家、工藤朔次郎だよ」

「弟……」

首を傾げたのをくすと笑う。

「呼びたいように呼ぶといい。だがお前の『太郎』はあいつじゃないのか？」

「え」

「可哀想に。結婚の約束までしたのに、時間という忘却は残酷だな」

なんだろう……なんだろう……花畑……夢の中……――おひめさま……

「次郎が奏でて、太郎がお前と結婚した。約束をしていた――」

……思い出せない……もみじの手……白つめ草の指輪……約束をした……だけどあれは―？

『ゆは』

陽ちゃん……

「――まあ、無理もない。俺達は七歳にもなっていたが、お前は三歳足らずだったからな。物心もついていなかったのだろう」

それから彼はぽおん、と鍵盤に指を乗せた。

「『再会』を喜ぼう、ゆは……おっと、今は『ゆうは』じゃなきゃ嫌なんだったな？　相変わらず我侭な奴だ」

微笑して頭にぽんと手を乗せる。

「お前は本当にいつまで経っても小さいな、本当に高校生か？」

「ゆは……太郎ちゃん、もっと優しかった――気がする」

ぷくと頬を膨らませる。

「俺は『太郎』じゃないからな」

細い月に目を細めてから、彼は向き直った。

「しかし音を頼りに辿り着くとは……相変わらずお前は耳が良いな、夕葉。楽譜も読めなければ楽器も弾かないのに」

「ゆは、ハーモニカを吹けます」

彼女のお守りを掲げて見せる。月の灯りに輝いて、とても綺麗で嬉しかった。

しかしくっくと彼は笑う。

「そうか、そうだな。ソがソになる前にソはあった」

よく分からないことを言う。それでなんだか暖かくて、ちょっと天ちゃんのお父さんと雰囲気が似ていた。

「ところで夕葉――」

手を取られて、ちゅ、と音がした。当然、何が起きたか分からなかった。

「あ……」

また……

「相変わらず音楽家の嫁になる気はないのか？」

吃驚した。それにやっぱり不思議だった。顔はそっくり朔太郎様なのに――

「二重人格、というのはどうかしら」

夕葉が昨夜の不思議な出来事を親友に打ち明けていると、脇から口を挟む声がした。

「……何言ってんだ、お前」

夭輔は呆れた顔で彼女――日下葉那を見やる。

「だって、桂木さんの記憶には『太郎』しかいないんでしょ？それで姿が全く同じ人が『次郎』だなんて名乗ったら。それに『再会』

にしては桂木さんの事を知りすぎていない？」
「あの、それはふた」
「典型的な二重人格――精神病の一種よ。普段精神的・状況的圧迫下で不可能でいる願望を別人格の自分が演じるの」
「昼は硬派、夜は軟派、みたいな？　きゃー、それおいしいかも！二次元では同時に存在できるし！」

きっちりばっちり話を聞いていた今村茜迄もが意味の分からない発言とテンションで話に混ざる。

「お前ら……」

勝手に話を聞いて勝手に話を進める女子二人に彼はうんざりとして無視を決め込もうとした矢先。

「ってかそれって願望では桂木にアプローチしたいってことか？あの理事長が」

……早川達也までが面白げに『その線』に乗ってきた。はあ、と溜息を吐いて彼はいい加減この話を終いにしようとした。

「工藤家の子息は双子兄弟だ。そうだろう？茜」

「うん、まあ今村プロデュース調べでは――てか今茜って言った？ねぇ、言ったよね？やった！何か知らないけど昇格してる！今のボイスに取るんでもう一回お願いします」

「ねぇ、何で急に慣れ慣れしくなったのかしら。班を一緒になってあげたくらいで勘違いしないでくれる？私のことは絶対に名前で呼ばないでね、霧崎君。寒気がするわ」

「……どっちだって一緒だろ」

彼は本当に疲れてきて投げやりに言った。しかし、

「ほお、もてる男は言う事が違うな。一般男子に女子の名前呼びは垣根が高いぜ」

と彼の友人でさえ囃した。実際はこの早川達也が茜茜と呼んでいるのでつい、という感覚だったのだが。しかし確かに彼は幼馴染だったし、下らない反論は止めた。

取り合えず話の焦点はずれたので良しとする。

「つーか……決まったのか？予定」

今は臨海学校での班別行動の予定を組んでいた。

五、六人程度の男女混合班を作り、海辺のコテージで二泊三日を過ごす、という修学院高等部の伝統行事である。ちなみに原則男女混合なのは、この間『使用人の付き添い不可』という掟があるので、バーベキューを一つするにも力仕事や料理の分業が必要と見なされている為だった。

これこそ臨海学校と称するこの行事の目的だった。

つまり、普段はほとんどの生徒が生活を使用人に依存する環境下にあるが、それはあくまで、

『しないのであってできないのではない』

――ということを「学ぶ」為に開かれていた。

しかしこの『使用人不可』さえ守れば後は放任と言える程自由だった。

コテージは広い範囲を学校が所有しており、勿論管理人もいれば食事の施設もあった。期間中ハイヤーを貸し切って自由にどこにでも行って良かったし、門限はあっても零時だった。

そのスケジュールを組み手配をするのは自分達でしなければならないが、ほとんどの生徒にとってこの臨海学校は『時間』と『家』に縛られずに羽を伸ばすことができる楽しい行事であった。

この言わば放任とも言える原則には子供心配の親が抗議の声を上げたこともあったらしいが、『その後その家がどうなったのかは分からない……』という噂が実しやかに流れているので参加を認めない親はいなかった。

実際、実利的な面でもこのグループ分けは案外重要で、その後卒業生でもこの時の人脈が有効になることもあった。第一こぞって「こういう学校」に子供を入れるのは教育方針設備元より「家の繋がり」が重要視される為だった。

さらに偏差値という点では結構の高い敷居があるので、これに入学していないということはその家の子は「届かなかった」と見なされる、という脅迫的概念もある。

さて、そういう訳で『桂木夕葉』は生まれて初めて班決めで引っ張りだこになるという経験をした。いつもはがやがやする中ぽつんと一人動かず、どこか良心的な班か、じゃんけんで『勝った』班（露骨を避けて）に引き取って貰うのを大人しく待っているのだった。

しかし今回は違った。同時に勧誘を受けた上、まごまごと何も言えないでいる内に勝手にじゃんけんで決まりそうだったところを、そこは天ちゃん（と達っちゃん）が『俺達の班だから』と有無を言わさず引き取ってくれたのだった。

その後はスムーズに先の班に収まった。

霧崎夭輔と日下葉那は犬猿の仲だったが、今村茜が『達也と幼馴染で良かったと思える唯一の瞬間』で霧崎夭輔と同じ班になれる特権を得、親友の日下葉那は『渋々』諦める――という一連の流れがこれまでに定着していた。

それで、今はその班行動を決めている最中だったのだが、「入れてもらった」夕葉は自分には発言権は存在しないと思っていたし、夭輔に取ってはこういう類は「どうでも」よかった。

それで手持ち無沙汰になって夕葉は夭輔に『月夜の不思議な出来事』を話していたのだった。しかしそれは他の班員から見れば「放棄・怠慢」に他ならなかった。

「霧崎君ていつからそんなに偉くなったの？自分では何もしないで私達を使用人だとでも思っているみたいね。勿論桂木さんはその権限があるんでしょうけど」

こう日下葉那に言われてしまった。夕葉はしょぼんとし、彼は倦怠気に言う。

「……俺が決めていいのか？」

「吃驚した、本当に主旨を分かっていないのね。『話し合い』・て言葉、辞書で引いてみたらどうかしら」

「まあまあ」

ご両人さん、と茜が笑顔で調停する。

「海に入るのはどうでしょうか、皆さん！ビーチバレー等に興じ」

「お、いんじゃね？」と達也が請合い、

「まあ、茜がそう言うなら」と葉那も答える、が。
「悪い……俺はパス」と霧崎夭輔が止めた。
これを受けて非難の声が上がる。
「えー、出し惜しみすることないじゃん」
「霧崎君て協調性が全くないわね。何を気取っているのかしらないけど」
「何照れてんだよ、夭輔」
それから早川達也は小突いて、
「お前、茜はともかく日下さんの水着とかこれを逃したらもう一生お目にかかれないぜ」と小声で囁く。
彼は思い切り微妙な顔をした。友人の視覚器官を疑う、というような。
そして多数決とばかりに茜は決め手の一名に意見を訊く。
「ねぇゆうゆう、海、入りたいよね？」
彼女はどぎまぎした。入りたくなかった。だけど仲良くしてくれる茜ちゃんに嫌われたくはなかった。
「ゆは……いいと思います。泳げないので見ています」
それでいい筈だった。
「大丈夫！泳がなくても、波に足つけるだけでも雰囲気味わえるし」
「あの、でも」
「好きな奴だけ入ればいいだろ」ぼそ、と夭輔が言うと、

「まあ、そうね」と珍しく葉那が同意した。
「いないことが協力ということもあるわ」
「ごめんなさい……」と夕葉が謝る。
なんだか微妙な空気になってしまった。

「オッケー。じゃつまり砂浜をきゃぴきゃぴするってことで、夜は花火！いいでしょ？」

茜が明るく取りまとめると、これには全員異議もなく可決された。

日下葉那の推察

自分用に宛がわれた部屋。ダンボールの底から紺色の布切れを引き出した。
ぴら、と広げる。
【かつら木　ゆうは】と書かれた学校の水着……
入るかな。買ってもらった時はぶかぶかだったのに、中学校の時にはぴちぴちだった
ぱんつを脱ぐ。
片足を入れようとした時、
「夕葉」
吃驚してこてんと前にこけた。
顔を上げると、男がいた。あれは――
「誰……？」
男は笑った。
「今度は記憶喪失の振りか？桂木夕葉」
相変わらず、馬鹿にするような調子で。彼女は悲しくなった。白いワッペンに書かれた名前のところをじっと見る。ひらがなの、マーカーで書かれたへたくそな字だった。
小学生の時は上手で、褒めてもらったのに……

色々なことを思い出して、泣きたくなった。

「勝手に部屋に入るのはいけないと思います……」

「開いていた」

そんな筈はないと彼女は思ったが、反抗的に見えないように下を向いて黙っていた。機嫌を損ねたりしたらきっと悪いことになる。特に今は――

「臨海学校に行くのか？夕葉」

びく、と体が固まった。どうしよう。

行きたいと言ったら行けなくさせられるかもしれない。でも行きたくないと言って本当に行けなくなったら？

「行かなくてもいい」

「い、行かないといけないと思います。全員の参加なので」

「そうか」

彼はそれだけ言ってぱたんと扉を閉めた。

――何だったんだろう。

彼女は安堵の息を吐いて、じっと蹲（うずくま）っていたパンツを拾って穿き直した。

……

臨海学校の当日。

空港（学校所有だが少し離れている）行きのバスに担任以外の全員が乗り込んで、いよいよ発進というところ。

ざわ、と前の方がざわめいた。

それは漣のように伝わって、皆前をぴょこぴょこと顔を横に出したり立ち上がったりして前方を見ようとするので後ろの方は何が起こったのやら状況が分からなかった。

尤も最後尾の一列席ではこの騒ぎに全く動じない二人もいたが。

一人は窓際で文庫本から目を上げず、一人は逆の窓側で肘を付いてつまらなさそうにしていた。

そして窓際の少女の隣、靴を脱いで席の上に立ち上がる者が一人。叫んだ。

「理事長じゃん！」

びくんと真ん中に座っていた少女が体を震わせる。

「違うな、元気なお嬢さん」

前に立つ男がふ、と笑う。

「工藤朔次郎――担任に代わり今回の臨海学校の引率だ。宜しく、諸君」

そしてそのまま後ろの席へと歩いていく。皆横を通るその人の顔をじっと見つめ、後部座席では今村茜が何故かあわわあわわとし、桂木夕葉は呆然としていた。
そして吃驚したままの夕葉の真ん前に止まると微笑んでこう言った。

「そこが俺の席か？可愛い夕葉」

そして彼女を軽々と持ち上げると自分がその席に座り、夕葉を自分の膝に乗せた。
隣では今村茜が鼻血を噴出し、その隣では日下葉那がちらと本から顔を上げ、もう片隣の早川達也は鼾をかいており、その横の霧崎夭輔は凄く嫌そうな顔をした。――直感で、分かっていたのだ。絶対に相容れない類の人種だった。

「太郎ちゃん……」

夕葉は驚く。
夜にしかいられない人だと思っていたのに。

「軽いな夕葉。前に飛んで行かないよう抑えていてやろう」

と、腕に抱く。「でも、」と彼女は答えた。

「一人一人座らないと危ないと思います」
「それもそうだな」

彼はちょっと席の状態を見やる。そして一番端に座っていた『彼』に声を掛ける。

「君、少し席をずれてくれないか。一番前の席が空いているから」

「――はあ？」と彼は面倒そうに目をやった。

「見れば分かるだろう？」と担任代理は朗らかに答える。

そう、恐らく――

席が一人分足らない。二人は女子だし一人は寝ている。だから言われなくても自分が席を譲るべきだと。

「……」

彼は無言で立ち上がった。不機嫌だったが、それ以上にどうでも良かった。むしろこういう奴とは近くにいたくない。

「夭ちゃん！」

としかし膝上の彼女が訴える。

「太郎ちゃん、夭ちゃんは駄目」

「そうか？」と彼は微笑のまま頭を撫でた。

――結局、早川達也が前の席に移ったのだが、これは彼の与り知らない間に行われた。

夭輔が彼を引きずって行き、その間彼は全く目を覚まさなかったのだ。

移動中、葉那はもうしらっと興味を小説に移し、茜はちらちらとシャッターチャンスを伺い、夕葉はそわそわとし、『彼』はにこにことし、夭輔はむっつりとしていた。

……

「やっぱりおかしいわ」

到着したコテージにて、日下葉那はベットに文庫本をとさんと投げて言った。移動中に読んでいたミステリー小説である。

「あ、葉ちゃん読み終わったの？」

と既に自分のベットとしたところ（葉那と夕葉の間、真ん中）に身を投げていた茜が顔を向ける。

「同じ顔じゃない？　どうして皆素直に別人物だと信じているの？」

「あ、理事長――の弟さんの話？」

うーん、と茜は考える。―？いや確かにそうなんだけど、

「だって、さあ……あれは理事長じゃないでしょ、性格的に」

「だから、二重人格なのよ」と葉那は主張した。

「でも一卵性双生児だったらあれくらい似るんじゃない？遺伝子が全く同じらしいし」

「人は育ちよ。姿形が全く同じなんて有り得ないわ」

「でもさ、夭輔君のお父さんも双子だって言ってたんでしょ？」

「勿論、」と葉那は頷く。「真次さんがそう言ったなら確かよ」

でも、と続けた。

「『今生きてる』とは言ってないじゃない？」

「……」

茜と夕葉の二人の上には「？」が飛んでいた。葉那は推論する。

「だから、確かに工藤朔太郎と朔次郎は存在した――でも、双子の内一人は不幸な事故で死んでしまった。それがトラウマとなり一人はもう一人の人格を自分の中に生み出した……。――あるいは」

考え深げに窓の方へこつこつと歩きながら続ける……

「双子の内一人が遺産を巡ってもう一人を殺してしまった……それを隠蔽する為に一卵性双生児であったのを利用して彼に成り代わり、周囲にはもう一人が『生きている』と欺き続けている……」

日下葉那は陽光を背に振り返る。二人はごく、と唾を飲んだ。

「す、凄い葉那ちゃん……探偵みたい！」

「テレビの人……！」

「ただの憶測よ……でも、」

興奮気味の二人を見やってくすと笑う。

「事実は小説よりも奇なり、てね」

――幸い、『……馬鹿じゃねぇのか』と空気を壊すような人間もいなかったので、少女達はこのドラマチックな真実について大いに夢中になり議論に花を咲かせた。

そうして、集合の時間を悠に三十分遅れた頃に漸く達也が呼びに

来て、この話題は一先ず区切りをつけたのだった。

浜辺の岩陰の、シャツ

ターコイズ・ブルーの海。その浅瀬では三人の男女が寄せ打つ波を楽しんでいた。

もっと離れた木陰では、二人が腰掛けその様子を見るともなしに眺めている。

その辺りに人はいない。

――他グループとのコテージ間はその他の存在を感じさせない程に離れて設けられていた。だから、きゃっきゃと陽気な浜辺の声を除けば、さわさわと葉陰が揺らめくのを聞くのみである。

「夭ちゃんも泳ぐの、嫌い？」

「……別に」

体育座りの少女の隣で、そっけなく彼は答えた。

「ゆは……海、初めて来た。きれい」

白い貝殻をいじって少女は薄く頬を染めた。

欠けていない、きれいな形の巻貝だった。きっと宝物になるだろう。

「……あっちで入ってみるか？」

彼は岩場のある方を指差した。死角になっていて、この砂浜からは見えない。

「でも、ゆは水着が変なので」ぎゅっと自分の足を抱く。
「なんだ」
くす、と笑った横顔を夕葉はちらと伺った。
「じゃあいいだろ」
「え」
立ち上がったのを戸惑って下から見上げる。包むような空の色。
ぐ、と引っ張り上げられた。白い砂がぱらぱらと落ちる。

「あ……てっ」

ぼて、とビーチバレーのボールが頭にぶつかって波にぷかぷか浮いた。
「何ぼけっとしてんだよ、茜。運動神経だけが取り柄だろ」
「らしくないわね……どうしたの――」
友人の目先を見て、ふうん、と葉那は無表情で観察する――
「入らない」と主張した二人が、手を繋いで砂浜を歩いていた。岩場の、見えない方へ向かっているようだ。繋いでいるというよりは、男子の方が女子の手首を引っ張って歩いて行っているようだったが。
「嘘だろ……あの夭輔が」

彼の友人は呆然として見ていた。
――いやいやいや。違う。あいつは「ああいう」奴じゃない。「そんな」いけすかない奴だったら気など絶対に合わなかっただろう。

「あんなものよ……だから嫌なのよね」

葉那は冷たく言い放つ。

「いや、違う！」

達也は友人を弁護した。

「多分――いや絶対、桂木が小便したくなったとかで面倒見てるんだよ。あいつ、桂木のことは保護者的な目でしか見てないから」

うん、と自分で言っておいて確信した。

「それはそれでどうなの？」

冷めた調子で葉那は返す。何かと騒いでいる筈の茜はなんだかずっと放心していた。

‥

夕葉はスカートをたくし上げて足を水に浸してみた。――透き通っている。波の模様が影になってゆらゆら揺れている。ざざんという波の微かな名残が足をくすぐる。

「ん……」

目を閉じた。

――気持ち、いい。

全部つかりたい、な……

ぱしゃぱしゃ。

目を開けて、ぱしゃぱしゃと歩いた。

「こけるなよ」

岩にこしかけた夭輔の仏頂面の声が聞こえるが、彼女には分かっている。とても暖かい声なのだ。

引く波を追いかけていっては追いかけてくる波から逃げて。追いかけっこを飽きることなく繰り返した。

楽しい。

楽しいな。

ようちゃん……

ざっぱん。

大きな波が来た。きちんと逃げたのだけど、速くて大きくて、捕まってしまった。

ざっぱん。

べちゃ、と濡れた砂の上にこけていた。

波は彼女を追い越していって、そしてずぶずぶと引いていく。

ずぶ濡れになった夕葉だけが顔に砂を付けたまま残った。

――くっくと聞こえる。

笑っていた。

笑われた。

彼女はとてもみじめだった。不格好を人に笑われるのはとても悲しかった。

波の来る音がする。いいや。いっそ浚われてしまえばいい。

「いつまで寝てんだよ」

ぐ、と引っ張り上げられて起きた。薄手の服はびしょ濡れだった。思わず、う、と涙ぐんでしまう。

「馬鹿」

あったかい布が押し付けられた。それは彼が脱いだ半そでのシャツだった。

「あっちで着替えて来い」

彼は岩場の影を指差した。そのちょっと目を逸らした感じは、高校生の陽ちゃんとそっくりだった。だから彼女は素直に従って、シャツを持ってびたびたと岩の方へと歩いていった。

「夭ちゃんのにおいがする……」

彼女は肘まで来た袖のところを嗅いで嬉しそうにした。

勿論ぶかぶかだった。裾が太股まで来てワンピースのようになっている。しかしそれにしては袖は長く裾は短くなんだかちぐはぐな感じだった。

彼は依然として顔をちょっと横に逸らしていた。

「夕葉」

二人共が、思わずびくっとした。隠れた岩場に突然人が現れたのだった。そしてその男に対して、夭輔は「どっちだろう」と考え夕葉は「今はどっちだろう」と考えていた。

「おいで、夕葉」

にっこりと笑ったので、ほっとして「太郎ちゃん、」とそちらの方に行く。今彼女の頭の中では余り整理が付いていなかった。「朔太郎様」と「太郎ちゃん」が同一人物なのか、
別の人間なのか。「太郎ちゃん」は好きだけど「朔太郎様」は嫌いだ。そうするとどちらの場合が彼女に取って好ましい事になるのかさえ検討していなかった。

しかし彼女は余り深くは考えず「今」どちらなのかを重要とした。結論を言葉に表すとすると、『人』が同じだろうと『人格』が違えばどちらにせよ別人物と見なす、ということだろう。

「太郎ちゃん？」

未だちょっと不安な様子で見上げる彼女に彼は微笑して頭を撫でてやった。

「夕葉、お前は本当に忘れっぽいな？　渡すものがあるから部屋に荷物を置いたらおいでと言っただろう」

「あ」
彼女は思い出した。それから申し訳ない顔になる。
「水着だ。今からでも遅くないだろう。着替えて皆と遊ぶといい」
紙袋を軽く上げてみせると夕葉の手を引いた。彼女は振り返って
「天ちゃん、また」と手を振る。彼も彼女の様子を見るに大丈夫そうなので何も言わず見送った。

夕葉はスキップしていた。
「嬉しそうだな？夕葉」
砂浜をぴょこぴょこ跳ねる頭を見て言う。海の日差しを受けて夕葉の細く柔らかい髪は茶色に輝いていた。
「天ちゃんのシャツ」
万歳して言うから裾はますます上がって、後少しでパンツまで（穿いたままなのかは分からない）見えてしまうのではないかという程だった。
「でもな夕葉、それは着替えて来ないといけないぜ？」
「え」
きょとんとした。
「夕葉、お前は確かにちょっと思慮が足らないな」

彼は微笑したままぽんと頭に手を乗せて少し屈んだ。あ、それは夭ちゃんのお父さんのようだった。なのできちんと耳を揃えて聴く。

「他の男のシャツなんかを着て喜んで、『俺達』がどう思うと思う？」

「他の……え？」

言葉がよく分からなくて、困った顔をする。その間にも彼はもっと屈んで、ぷち、と一つ目のボタンを外した。

「夕葉、すぐにでも剥ぎ取りたいと思っている」

少し真剣な声だった。

「え、え」と言う間にぷちぷち三つ目まで外れる。次で胸のところが開いてしまう――ところで止まった。そこから順に、またボタンが嵌めなおされていく。

「分かったら着替えて来い」

彼は相変わらず微笑して言った。彼女は正直な所何が起こったのか、彼が何をしたかったのかはよく分からなかったが、でも黒い瞳の奥に揺らめく何かを感じて素直に従ったほうが良さそうだとこくんと頷いた。

「いい子だ」

彼は微笑んでくれた。しかしこう言う。

「お仕置きは軽くしてやろう」

「え」

途端に不安な顔になると彼は笑う。

「冗談だ。でも水着を着たら一番に俺に見せに来てくれるだろう？」

怒っていないのにほっとして思わずこくんと頷く。水着はもう見ている筈なのにな、とか、順番？　とかハテナが浮かんだが、きっと自分には分からない深淵の考えがあるのだろうと思った。

夕葉を見送った後、彼は砂の作った小さな足跡を見やる。

「――それくらいはいいだろう？」

じゃり、と踵を返し夏の太陽に背を向けた。

「なあ、『兄弟』」

もしも婚約者が二重人格だったら

『他の男のシャツなんかを着て喜んで、俺達がどう思うと思う？』

彼女は考えた。べたべたの髪をシャワーで流し、こしこしとタオルで拭いている時だった。

――朔太郎様は、怒る。

そう考えた。きっと、『不誠実だ』と言うに違いない。彼女の身分は『婚約者』なのだ。

例え初めて出来た友達からだって親切を受け取ってはいけない。彼女が『約束』を守る為には、差し出されたシャツを突き返して惨めに濡れたまましょぼしょぼと一人帰るしかなかったのだ。

考えながら、彼女は水着の入っている袋を開ける。白い。二つある。いや、違くてこれは上と下と分かれた水着だった。下着のようだが、これは水着なのだ。でもこれは日下さんが着るような大人の水着だった。

それは一度紙袋にしまった。彼女としてはできるならば無かったことにしてまた日陰で皆を眺めるのに戻りたいと思ったのだが、そうだとしても『一番に見せに行く』という約束を遂行しなければならなかった。

それで、もう一度開けてパンツ――でなくて白い水着を穿いた。残念なことにサイズがぴったりだったが、脇がちょうちょ結びになっていて転んだら解けないか少し不安が残った。それから上を付けるのに取り掛かる。これは着けてみて嬉しい発見があった。

――膨らみがある。

胸のところにクッションのような柔らかいのが入っていて、上から見るとおへそでなくて『胸』があった。これは大人のようだ。差してそういうのを望んでいた訳ではなかったが、皆と同じようになれたのは嬉しかった。鏡の前でくるくるしてみて、これなら余り不恰好ではないのではないかと思ってみたりした。ぶかぶかでもきゅうきゅうでもなく、不思議にぴったりのサイズで腰の両脇と背中の蝶々結びも可愛く見えた。

でもやっぱり下着のようで少し恥ずかしかったので、青いチェックのワンピースを上から着てサンダルを履いた。

――天ちゃんなら、見せても笑わないかな、と思った。

教えて貰った番号のコテージを見つけて、急ぎ足をした。なるべく早くにしたのだが大分待たせてしまったかもしれない。それに、重要なお願い事があったのだ。ぎゅ、と手に包んだものを握りなおして入って行った。

「太郎ちゃん」

奥の畳で団扇を扇いでいる姿を見つけて駆け寄る。

傍に膝を付いて、それから驚かすように手にあったものを耳に押し当てた。白い貝殻だった。

「……聞こえる？太郎ちゃん。海の音」
「……ああ」
目を瞑って答えた返事を聞くと満足してそれを差し出す。
「あげる。太郎ちゃん」
こんな宝物を喜ばない筈がなかった。彼女だって少し迷ったのだけれど、だけどこれは探せばまた見つかることだってあるかもしれないし、見つける為にはまだここにいなくてはいけなかった。
「あのね、」
とちょっともじもじして座り直し小さな頭を彼の肩に預ける。
「――さっきのこと、朔太郎様に言う？」
「――さっきのこと？」
を言われてしまったら、この臨海学校から強制的に帰されるかもしれなかった。まだ帰りたくなかったのだ。
「天ちゃんといたこと、内緒にしてほしいの……」
ちら、と顔を見上げる。微笑んで、「お前が望むなら、夕葉」といつものように言ってくれると思った。ーーのだが。
「隠すようなことをしていたのか？」

びく、とした。冷たい声音だった。冷たい眼だった。
反射で頭を外したが、傾けていた肩も血が通っていなかった気がした。本当に、本当に恐ろしさで背中のうぶ毛も逆立ちながら恐る恐る伺う。

「……た、太郎ちゃん？」

男は答えない。腰は立たずにじりじりと下がって行った。
男の口元が皮肉に笑った。

「婚約者の顔も分からねぇのか？夕葉」

――……
後の事は覚えていない。
気が付いたら、コテージのベットにいた。
窓を見たら夕日も沈むところだった。部屋は薄暗い。
ぼんやりしながらのそ、と起き上がる。部屋の居間に繋がる戸の下からは光と、色々なカレーのようないい匂いがした。
くんくんと匂いにつられるままにのたのた戸の方に行く。ドアを開ける。
ぱっと光に包み込まれた。

「夕葉ちゃん！」

元気な声が駆け寄ってくる。眩しくて目が開かない。

「か、可愛い……寝起きだ。寝起き可愛い！」

もうちょっと遠くの方からも声が聞こえてくる。

「――今村。吹き零れているが消していいのか？」

「見れば分かるでしょ。使えない男ね」

「はぁ？　ジャガイモの『皮』を剥いて『元々身が無かった』なんて言い出す女よりはましだろ」

「おい止めろって……あ、日下さん、包丁の持ち方が違――夭輔！」

「合ってるわ。こうして持った方が刺しやすいでしょ？」

「てめぇ……」

なんだか友人の身に危機が迫っている気がして、これには頑張って目を開けた。

台所のところに皆いて、ご飯の用意をしていーーたようだった？

葉那が包丁を夭輔の胸に差し向けていて、すんでのところで夭輔がその手首を掴んで止めていた。

「離してくれない？気持ち悪いから」

「折ってもいいならな」

微笑と引き攣った口元をそれぞれ浮かべて向き合っている。

葉那は涼やかな微笑だが、引くどころかぎりぎりとどうやら本気で力を込めている。しかし流石に夭輔は微動だにさせなかった。

「嬉しいわ。退学どころか少年院に行って貰えるなんて。霧崎家始まって以来の醜聞になるんじゃないかしら。家業も継げないわね」
「家業？家のことは放ってたまにふらっと帰ってくることか？」
「本当に最悪ね。真次さんが可哀想だわ。仕事も理解してもらえない家庭にいるなんて！」
「……知った風に言うな」

なんだか不穏だった。喧嘩はいつもの事だが、なんだか達っちゃんも「まあまあ」と笑っては言えないような空気を漂わせていた。夕葉は頭がむずむずしていた。

『――……から、……責任――』
『それは……――なら……』
『――……夕葉――……』

喧嘩。やだ。やだ。ごめんなさい……

「お前らいい加減にしろよ！桂木が泣いているだろ」

はっとした。皆はっとした。葉那も、夭輔も、――夕葉自身も。ぽろぽろしているのに気づいてまだ頬から落ちていない涙を指で拾った。

「……ごめんなさい」
「悪い……」

二人とも謝ったが、それは互いにではなく夕葉に向けてだった。しかしここでそんな喧嘩をするべきではない、ということだけは

互いに一致したようで同時に手を離していた。睨み合ったりだとか舌打ちしたりとかいうこともなく、もうすっかり無かったことのように作業に戻った。

とたん、と戸が開いて、そういえばいつの間にか消えていた茜ちゃんが出て来る。手に何か持っていた。

「あーっ夕葉ちゃんもう目開けちゃった……もーっカメラ真っ先に入れたから奥の方にあって……あれ？なんか目赤い？どうしたの？ごめん不謹慎じゃなかったら撮っていい？」

空きっ腹に進まない調理――

ふう、と溜息を吐いて達也が提案する。

「なあ、もう諦めてカレーの素を使おうぜ。何も香辛料から調合しなくても……」

じゃがいもにんじん、玉ねぎお肉。
とんとんと、夕葉は野菜を切ってフライパンに入れた。ちょっとしたらお鍋に入れて中火にする。……あくを取って……くつくつ。カレー粉……とろっとして。

「できたーーっ」

と茜（隣で見ていた）が歓声を上げた。丁度夕葉が鍋を火から上げたところだった。代わりに天ちゃんが持って運んでくれる。皿やらの準備は皆がしてくれていた。
合間に作ってあったサラダを出して、塩水を通したりんごは冷蔵庫に入れてある。

――しきり直しからほんの三十分足らずで夕食は完成した。

それまでの奮闘三時間については皆忘れることにして、皆が心無しほっとした様子で席に着く。計らずしも食事することの有難さを知ったのだった。

「おいしい。幸せです。夕葉ちゃんの手作り……」

とろけ落ちないように頬っぺたを持って茜が言う。専属シェフがいる葉那でさえ、こんなに美味しいカレーライスを食べたのは初めて――と感じていた。尤も、『たかがカレー』を食べるのに三時間も奮闘したのも初めてだったが。

「そういや桂木、あの担任代理の『先生』は何の用だったんだ？お

前の居場所を聞いてきたけど」
「そうそう、夕葉ちゃんそれからいなくなっちゃって……夭輔君に聞いても知らないって言うし」
「無責任――」とは言い切らずに葉那は口を噤んだ。
さっきの今なのでちょっと自重するつもりらしい。

「あ！」

と大変な事実を思い出してがたんと夕葉は立ち上がった。

「太郎ちゃんと朔太郎様は同じ人です！」

「えーーっ本当に！？」
「驚くことじゃないじゃない？」
「てかお前、両方とも呼び方……今更か」
「――取り合えず座れよ、桂木」

彼女はとたんと座り、それから興味深々の皆（主に茜ちゃん）に先ほどの恐怖の出来事を話し始めた。

＋＋＋

「――ふんふん……、それで気づいたらベットの上にいたと」
茜は何度も頷く。
「……それ、寝てたんじゃね？」

――とは達也の意見だった。隣の夭輔も黙ってはいるが同意見の

ようだった。雲をじっと見て『お空に象がいる！』と言い出すような友人なのだ。

「ゆはの貝が失くなっていました」

と彼女は『証拠』を挙げる。実際、彼女だってあの大切な貝の行方が分からなくなっていなければ夢だと信じたかった。やはり実際に突き当たってみると、好きな人が嫌いな人だった衝撃はその逆よりも大きく悲しかった。

「Ｈｕｍｍ・・・・――ということは、亡き人はお兄さんかな。ピアノを弾いてたって事は『音楽家』の方だろうし」

「限らないわ。聴いてないから分からないけど、ピアノだったら嗜みで弾ける人は多いもの。アマチュアのコンクール位なら大抵賞を取れるわ」

「うん、『上澄み』の話ね。――って、もしかして夭輔君も弾けるの？」

彼は黙っていた。

「弾けるんじゃない？真次さんは音楽鑑賞がご趣味で自身でも様々な楽器を演奏できるから……特にヴァイオリンの腕はプロでも――」

「弾かねぇよ」

と夭輔が遮った。

「親父が楽器を弾いているのなんか、見たことがねぇ」

しかしこれは糾さなければならなかった。彼女は手を上げる。

「ゆは、聴いたことあります」

「え、本当？桂木さん」　初めて葉那が夕葉にもっと聞きたそうな目を向ける。

「はい。ゆは、ハーモニカの吹き方を教わりました」
「……ハーモニカ？」
男二人は怪訝な顔をする。
「――って吹き方とかあるのか？」
「あるわよ。当然」と葉那は言い切る。「ね、桂木さん？」
夕葉はこくんと頷く。
「涙は音楽になります。涙は伝わらないけれど音になったら妖精さんが伝えてくれて、宇宙でたった一つの言葉になります」
「……」
「……」
「……」
「……」
皆肯定も否定もし難く、取りあえずその話は流れた。

＋＋

「あーあ……お前、本当馬鹿だろ」
そこから少しコテージでは、心底呆れたと言いたげな深い溜息が吐かれた。
「折角夕葉が水着姿を見せに来てくれたのに。――一体何しに来たんだ？」
本末転倒だ、と嘆く声に、
「こっちの台詞だ」

と少し苛立った「同じ声」が答える。

「一体何を怒っているんだ？お前の代わりに夕葉を見守って、水着をプレゼントしたことがそんなに気に食わなかったか。だがお前が怒っていることは全てお前の所為なんだぜ」

窓辺に立った男が肩を竦める。

「お前が早く気づいてやっていれば、あの『親切な少年』に気を使わせることもなかった」

「……知っていた」

「尚更悪いな。ーーまあ、お前が渡したところで確かに着てくれたかは疑問だな。相当嫌われてるみたいだからな……一体何をしたんだ？」

「関係ねぇだろ」と吐き捨てる様に返す。

「いいや、あるな。確かに『約束』は守る。だが『他の男』に取られるとなれば話は別だ」

「『約束を守る』？なら何故あいつの前に姿を現した」

「現したんじゃない。見つけられたのさ。仕方ないだろう？悲しい音楽が聴こえてくるのにそれを無視するなんてことができるのか？」

「……」

「それに『今更現れた』のは俺もお前も同じだろう？俺やお前がどう決めどう想っていたって、あの子にとって俺たちの存在は過去だった」

男は黙っていた。『もう一人』が潮風の向こう側の見えない月を見る。

「それでも見つけて欲しくてここにいる」

くす、と口に弧を描いて窓辺の男が振り返った。

鏡を挟んで向き合ったような、しかし座った姿の男と見合う。
睨みつけるような灰色の眼に向かい、男は揶揄するような微笑を向ける。

「なあ、『次郎』？」

夕葉、波に流される

『ゆは、たろちゃんとけっこんする！』
『おっきくなったらおひめさまになるの……』

――男はぼんやりと目を覚ました。

「……ゆは」

＋＋

「か、かわい……」

茜はつぅ、と鼻血を垂らして手で抑えていた。
夕葉は蝶々結びの白い水着に着替えていた。
どぎまぎして出て行ったのだけど、皆じっと見るので恥ずかしくてずっと自分の親指を見ていた。

「似合うわ、桂木さん」

鼻を摘まんで上を向く茜ちゃんの隣で、日下さんがにっこりと微

笑んで言ってくれた。

「……夭輔」

「……なんだよ」

「いや……」

男の子達は何も言わなかった。

達っちゃんはなんだかとても驚いていて、夭ちゃんはすぐにそっぽを向いてしまっていた。

だけど夕葉はとても嬉しかった。

こんなことは初めてだった。

何も恥ずかしくない。

夕葉は今、皆と『同じ』だった。

夭ちゃんのお父さんに貰った、魔法の小瓶のおかげだった。

もう誰も、じろじろしたりひそひそすることはない……。

「あー、可愛いなあ、夕葉は」

双眼鏡を覗いて男が言う。

「再会した時には正直もう少しの発育を期待していて残念だったが、今見るとあれこそ夕葉の魅力を発揮させている体型だな。いや、勿論将来への期待は込めているが――なんだよ次郎、その目は。言っておくが俺はあくまで影から『見守って』いるんだぜ？夕葉が沖に流されでもしたら大変だからな。お、夕葉が浮き輪で浮いている。可愛いなあ」

縁側から熱心に海辺の様子を『見守る』若い男の姿に、はあ、ともう一人の男は溜息を吐いた。双眼鏡を覗いていた男はちょっと目を離し揶揄するように笑う。

「本当は見たいくせに。じじくさぶりやがって――ほら、」

と男は双眼鏡を軽く投げるが、受け取った男はそのままそれを見下ろしたままでいる。

「全く、そういうのがむっつりの証拠だぜ。『そういう』目で見ないなら躊躇う必要なんかないだろ」

くすくすと笑われるのにむっとして、男は漸く眼に当てる。が。

「……流されてる」

「なんだって？」

一気に水分を奪われたようなその乾いた口調に、からかい返しとも思えず奪い返す。

確かにいつの間にかに浜辺から切り離されて波に弄ばれている少女がいた。

「なんてことだ！夕葉に焦点を当てすぎて気が付かなかった。おい次郎――」

彼が双眼鏡を目から外した時には、もう既にその姿は見当たらなかった。

「……そうだろう？次郎。さて俺は？？」

彼はどこか口元に微笑を見せて、しかし急ぎ足でどこかへと向かっていった。

夕葉は今、とても困っていた。

ざぶんざぶん。どんどん遠くなっていく。

砂浜では皆熱中してビーチバレーをしていた。

2対2で数が合わないのを見て取って、彼女は自分はやったことがないから初めの回は見ていて覚えたいと申し出たのだった。

でも暑いから折角膨らましてもらった浮き輪で浮いて、ぷっかぷっかと揺れながら眺めていた。

そのうち砂浜にきれいな貝殻を発見し、取りに行こうとしたらしかし波が浚っていってしまって、ということは波の連れて行った向こうにそれはあるのだろうと思ってちょっと遠くに出てみたら、いつの間にか足が着かないのに気がついて、そうこうするうちにどんどん離されていってしまったのだった。

彼女も段々にこれはまずいと気が付いていたのだが、大げさに叫んでみて皆の注意を引くようなことはしたくなかった。折角熱中しているのに中断されたらどうだろう。おまけにここまで来て手間を

かけさせることになるのだ。折角『普通』になれたのに、お荷物になるのは嫌だった。

波は戻してもくれた。だからなんとかなる気がしていたのだが、しかし戻してくれるより引いていく方が大きくて、総じてまあ、どんどんと流されていった。

最早彼女の細い声では叫んでも届かないだろう。

手遅れだった。

そして彼女はぼっと空を眺めた。

彼女の傾向だが、自分の手に負えないことが分かると後は天に任せるようなところがあった。たった一度だけ現実に抗ったことはあったが――抗えばそれだけの『代償』が必要だということも身に染みて知ったのだった。

眩しい太陽。

陽ちゃん……

浮き輪にしがみつくのも疲れてしまった。

もう離してしまってもいいだろうか。

――夕葉……！

遠くから誰かに呼ばれたような気がした。でも、気のせいだ。

ゆは……そう呼ぶ人は、呼んでほしい人はもういない――

ざぶん。

大きな大きな波が来て、彼女は自分が？み込まれるのを眺めていた。

丘の上の結婚式

ひたひたと水滴を垂らして、男はずぶぬれの少女を丁寧に抱き下ろした。

そこは砂浜からは離れたところにある洞窟のような岩場だったが、潮の流れに逆らわずに一番辿りつき易い足場だったのだ。彼は荒い息を吐く。女の子とはいえ人一人抱えて、それも全速でここまで泳いで来たのだった。

少女の心肺が規則正しく動くのを見て自らもどさりと背を岩に預ける。眼を閉じたら死んでしまうのではないかと思うほどの疲労感だった。

それでも彼は眼を閉じた――

＋＋＋＋

囀りの雑踏。

色のけばけばしい繁殖期の鳥を全て一緒の籠に放り込んだような煩さだった。

――こちらの校舎には来たくなかった。

だが用事があったのだ。提出してきた転学届け。そのついでに見つけた……

『工藤朔太郎』

「兄貴」

カラフルの中に際立つ黒い背中に呼びかけると、呼ばれた男はちらと目を流す。
――じゃあ今夜、
ちゅ、と肉厚の唇を啄ばんでから振り返る。ブロンドの女はｂｙｅ、と言って傍から離れた。自分と目が合ったと思ったのか、くすくす笑ってウィンクする。軽薄な女だ。
「なんだ？弟よ」
気まずい様子もさっぱり見せずに兄は優雅に振り返る。
「珍しいな。大学でお前の方から来るなんて」
「――今夜は演奏会だろ」ぼそ、と言う。
「忘れていないとも。コネ作りの為にお前と俺とで一楽章やるんだろ。伴奏とは言え緊張しているぜ、いや肥えた客や著名の音楽家を相手にすることじゃない――『天才』と組まされることさ」
どこが緊張しているというのか、兄は余裕の笑みでおどけて見せた。
「さっきの女は――」
「今夜、か？　その後さ。別にいいだろ」
「……」

「次郎。俺が不貞だと、そう言いたいんだろ？　だがこれは浮気じゃない、本気さ。女性をエスコートする術を身に着ける勉強という意味で。――ああ、分かった、確かに『遊んでる』要素も否まない。だけどな、女の嘘も浮気も統べて包んでやれるような余裕のある男になるには、こういう若い時の『過ち』が重要なんだよ。これをしない男こそが、自分はずっと誠実だったのに裏切られたといって女を詰るんだ。そういう男にはなりたくないだろ？」

「随分勝手な言い訳だな」

「なあ聞けよ。あの人、若い時は家庭に収まりはしないだろうと言われたそうだが、結婚してみればすっかり愛妻家だというじゃないか。仕事でも切れて家庭も大事にする、ああいう人になりたいな、俺は」

そうだ今日の招待客にも呼んである筈だ、と少し弾んだ声で言うのをふん、と鼻で嗤った。

「そう『癖』が直るものか。昔から隠蔽は十八番だったって言うだろ、あの家の人間は。本性は高慢で狡猾なきつねだ」

「お前はちょっとじいさんの影響を受けすぎだ。貞操観念にしてもな。日本だって今は昔とは大分違うんだぜ」

お前がじいさんの名前の方が合ってたな？と兄は笑う。弟の方は少しも笑わずに瞳を閉じてから答えた。

「……まあ、いい。俺たちは違うんだ」

「そうとも。俺たちは違う」
双子の兄は神妙に、しかし面白げな表情を隠さずに頷いてみせる。
「――今夜の演奏会が終わったら、話がある」
背を向けた。しかし次郎、とその声が追う。珍しく真剣な声だった。
「どう見えようと、俺は忘れてはいない。『あの子』のことを」
振り返る事はせず、男は不協和音を奏でる烏合の中へと消えていった。

＋＋

てん、
丁寧な調律を終えて、張り替えた弦を弾いた。
てんてん、と指遊びで弾くうちに、それはメロディになっていった。
――いつからだろう。
物心が着いた頃には既に、自分とこの楽器は同体だった。
体であり心であった。

遊ぶ時でさえも――

『じろちゃん』

女の子は自分を見つけては寄って来た。
色白で茶っぽい瞳と髪色――全体的に色素が薄くて頼り無さげな雰囲気の女の子だった。
舌足らずに名前を呼んでとたとたと、転んでしまいそうに危なげに走ってくる。
それで自分の前にぺたんと座った。
彼女はいつだって、彼の演奏の一番目の客だった。
遊びに来れば真っ先に兄にじゃれつくのに、一度弓を弦に当てればどこからともなく聞きつけて、ノックもせずに部屋に上がりこんできては居座る。

『たろちゃん、じろちゃん』

彼と彼の兄とを見分けられるのはその女の子だけだった。
彼と彼の兄とに分け隔てが無かったのはその女の子だけだった。
兄も音楽には「トレビアン」な才能を示し彼らは姿形も能力も『全く同じ』双子の兄弟だった。
――ただ違ったのは、家を継ぐのは兄であり彼ではないということだった。
そしてこれは彼らの周囲にとっては決定的に『違う』事項だった。

ひみつが丘――そう呼んだ庭の一部で彼らはよく遊んだ。遊んだと言っても、彼は家から引っ張り出されて兄と従妹の二人がじゃれ合うのを木下で眺めていただけだったが。秘密の丘は誰にも踏み荒らされることのない三人の聖域だった。三人の時でしか三人の誰も踏み入らなかった。

シロツメクサが丘に満面に咲く頃。まだ物心もつかないであろう小さな従妹が、どこで覚えたのか突然言い出した。

『ゆは、およめさんになりたい』

『どっちの？』と兄は聞く。

『どっちも』と従妹は笑顔で答えた。

『ゆはは欲ばりだなあ』

兄は笑う。

『それなら三人で結婚しよう』

そんなことは無理だと分かっている筈だった。そういう適当な物言いは彼は好きではなかった。

『おれは嫌だ』と彼は言葉短かに答えた。

『ゆは、次郎は嫌だって』

『やだ』

小さな従妹はぐずった。

『ゆは、たろちゃんとじろちゃんとけっこんするもん……』

よしよしと兄は小さな頭を撫でる。

『次郎は恥ずかしがっているだけなんだ。許してやってくれ』

『たろちゃん』

ぎゅ、と彼女は兄の手を握った。

『ゆはのこと、すき？』

『好きだとも』と兄は答えた。

『じろちゃん』

彼女は兄の手を引っ張ったまま自分の傍に来てその手も握った。

『ゆはのこと、すき？』

『……』

『答えてやれよ、次郎』と兄が促し、

『嫌いだ』と彼は答えて小さなもみじの手を振り払った。

『う、』と彼女は言った。

それから泣き出した。なんとかしろよ、という目で兄が咎めるので彼は溜息を吐いてバイオリンを弾き始めた。音楽が奏でられると、彼女はひくひくしつつもだんだんに泣き止んだ。それでもまだぐずぐずとして。

『なんでじろちゃん、ゆはとけっこんしてくれないの……』

『お前は「おひめさま」になりたいんだろ』
『うん。ゆはね、おっきくなったらおひめさまになるの』
彼女はぱっと顔を輝かせて「ひみつのゆめ」を打ち明けた。
『よそゆきのおようふくをまいにちきて、いちごのけえきをまいにちたべて、おうじさまとおっきなおしろにすむの』

『……お前が結婚したいのは太郎だ』

『たろちゃん、おうじさまなの？』
『まあ、そうだな』
と、兄は兄で朗らかに答える。
彼女はちょっと考えた。お姫様は王子様と結ばれる――

『ゆは、たろちゃんとけっこんする！』

彼女ははしゃいだ。大好きな従兄弟は王子様だったのだ。

『じゃあ結婚式を挙げようか、ゆうは姫』
兄は跪き、彼女の手を取ってキスをした。
『うん』と彼女はくすぐったそうに答えた。

『じゃあ次郎、お前は音楽家の役だな』

丘を降りようとしていたところを呼び止められて彼は頷くしかなかった。

シロツメクサの丘、木の下で挙式は行われた。
シロツメクサで作ったブーケと花冠を身に着けて、彼女はとても幸せそうだった。
病める時も健やかなる時も、と結婚の誓いの後、兄はいつの間に作ったのか白い花の指輪を小さな指に嵌めた。
兄はキスをしようと屈み、彼は目を瞑って演奏を続けた。

いつものようにシロツメクサの丘が夕日に染まり、三人は別れた。
いつものように。

最後の演奏

『次郎、次郎。悪かった。だから考え直してくれ』

兄は言い、しかし弟は単調な口調で答えた。

『留学は前から先生に薦められていて考えていた』

『だからって何も明日明後日発つなんてことはないだろ。夕葉が泣き出したらどうするんだ？』

彼は何も答えなかった。

『……次郎、どうしても行くのか？』

『――ああ』

『それなら俺も行こう』

彼は眉を顰めた。

『何を言っているんだ、お前は――』

『次郎、お前は分かっていない――いや知らない。お前は俺の弟なんだ』

『……知っている』

『いいや。お前にとって俺は目障りな存在だろうが、俺にとってお前はたった一人の弟なんだ。父は顔も覚えていない、母は死んで、じいさんは忙しくて俺たちに構っているひまはない。これ以上、ど

うして家族がばらける必要がある？』

『……宇宙じゃない。すぐに帰って来れる』

『いいや帰って来るものか。お前は俺が嫌いなんだ、この家も。きっと信じてくれないだろう、だけど俺だって嫌だった。俺とお前とが差を付けて扱われるのが。いつもお前は「二番目」に扱われる。「俺じゃない方」として扱われる。俺たちに違うのは名前だけなのに！』

『……名前だけじゃない』

『そうだ、違うとも。夕葉には分かっていた。夕葉はお前が――お前の音楽が好きだった。許してくれ、次郎。嫉妬で意地悪をしたんだ。夕葉はいつだって、バイオリンの音が鳴り出せばお前のところに行ってしまうから』

『今日のことは関係無い。――分かっていた』

『何を関係ないと言うんだ、何を分かっていたというんだ』

『「俺」にはあいつを幸せになんかできない』

『それはつまり、お前までが「朔次郎」には価値が無いと思っているのか？　お前が演奏をする時の夕葉の顔を知らないとは言わせないぜ』

『「持っている奴」の戯言だな。金があれば音楽は聴ける』

『金が無くたって音楽は聴ける』

『俺の音は聴けないさ』

『次郎……』

『じゃあな、兄貴。あんたの結婚式にはまた演奏してやるよ』

皮肉な顔をする弟に兄は心を決めた。

『いいや、次郎。行かせるものか――俺の過ちでお前を独りにはさせない』

＊＊＊

てん、てんてん……

「俺は本当に、『音楽家』で良かったんだ――兄貴があいつを幸せにしてくれるのなら」

男は弦を弾くのを止めた。

そろそろ時間だった。

＋＋＋

「素晴らしい」

演奏会の最後を飾った双子の兄弟に、皆が立ち上がり惜しみない拍手を贈った。

――工藤朔次郎――

それは必ずやこれからの音楽界に馳せる名に違いなかった。招待された客達は、この若い才能が世に出る以前に居合わせた自分の幸運に感謝した。

「その一言に尽きる。何が素晴らしいと言って、奏者の演奏は勿論だがそれに対する伴奏者の敬意と理解、何よりは君達の奏でる音楽が愛に充ちている事だ。まるで愛する妹に捧げる子守唄のような……。若いのに羨ましいな、俺が天使に出会ったのは――いや失礼、うっかりすると妻の自慢をしてしまう」

「――愛？」

思い切り顰め面の顔をする弟に代わり兄が微笑で応対する。

「有難うございます、霧崎さん。機会があれば貴方のバイオリンも是非聴かせて頂きたいものです」

「いやいや、今日の演奏を聴いてはもうできないだろうな。俺の腕では愛しい人への愛を伝え切れないと知ってしまった」

それから考え深げに続ける。

「ただ、何か悲壮な決意も込められている気がした――この曲が終われば腕を切り落としてしまわんというような、切ない調べだ。気のせいならいいんだが、」

と、吸い込まれそうな錯覚を覚える黒い瞳を向けられるが、兄は動揺無く答えた。

「気のせいですよ」

「そうか、良かった。次は必ず妻と聴きに来よう」

彼の前を辞して背を向けた時、しかし聞こえるか聞こえないかの声でもう一人が呟いた。

「次なんてねぇよ――いずれにしろ」

＋＋＋

「次郎、」

控え室の扉を閉めるなり兄は口を開いた。

「どういうことなんだ？さっきの言葉は――それに演奏も……兄貴を不安にさせるな」

「その話だ、兄貴。いや、『工藤朔太郎』――」

彼は挑むように灰色の眼を向けた。

「俺にその名を譲れ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8893u/

お嫁さんにしてください　(工藤家の事情)

2012年1月7日00時50分発行